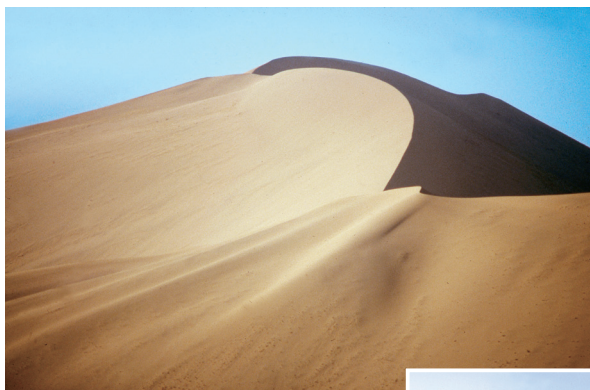


ボツリ又ス菌を訪ねて



中国甘肅省敦煌市の南に広がる鳴沙山。著者は1981年土壌採集のため、甘肅省と新疆ウイグル自治区を訪れた（著者撮影）



鳴沙山の砂地を行く
(1981年 著者撮影)



万里の長城最西端に位置する甘肅省の嘉峪関
(1981年 著者撮影)

広大な砂漠が続く鳴沙山のふもとに湧く月牙泉。鮮やかに砂山を水面に映す（1981年 著者撮影）





中国新疆ウイグル自治区のトルファン地区。近くにカレズと呼ばれる地下水路がある
(1981年 著者撮影)



現在はユネスコの世界遺産となっている莫高窟 (1981年 著者撮影 右下も)



敦煌・莫高窟の第十七窟の前で (1981年)





中国チベット自治区の区都ラサにある世界遺産ポタラ宮を背に、恩師の西田尚紀先生（右）と（1982年）



トルファン地区にある城址遺跡「高昌故城」（1981年 著者撮影）。同地区には『西遊記』で有名な火焰山をはじめとする多数の史跡が点在している



第1回の日伊共同プロジェクト締結交渉（サンタ・クロチェ教会前で、2004年2月15日）



サンタ・クロチェ教会大礼拝堂の足場で「聖十字架物語」を見学（2009年6月9日）



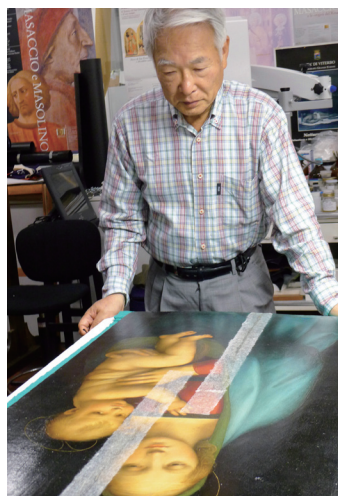
聖女キアラ（ジョット画）



サンタ・クローチェ教会バルディ礼拝堂の前で（2009年6月9日）。奥には聖女キアラが見える



サンタ・クローチェ教会の中庭で見つけたアカンサスのそばで（2009年6月9日）



フィレンツェ修復研究所で修復中のラファエッロの傑作「大公の聖母」を前に（2011年6月7日）



サンタ・クローチェ教会の修復完成記念式典
(2011年6月7日)



フィレンツェ修復研究所との追加プロジェクト調印式(2009年6月8日)



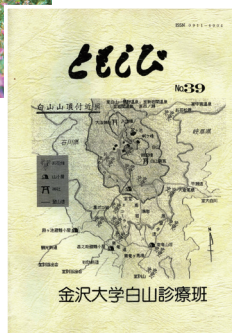
当時のフィレンツェ市長(現イタリア首相)のマッテオ・レンツィ氏から「フィレンツェの百合」章を授与される(2011年6月6日)



白山室堂診療所の前で（1996年）



白山御前峰とコバイケイソウ（2000年）



金沢大学白山診療班
の会誌「ともしび」

金沢大学白山診療班

揮毫 MAP



② 草木の心

2011年11月24日
角間の里前



① 楷樹

2013年11月2日
科学の丘



③ 金沢大学発祥の地

2011年11月5日
金沢彦三郵便局前



④ 金沢大学誕生の地

2010年11月6日
金沢城公園石川門近く



⑤ 金沢医学館跡地

2011年11月6日
金沢医師会館前

【金沢市内】



⑥ 金沢大学医学部 金沢大学大学院医学 系研究科

2000年4月3日
金沢大学医学類
F棟玄関前

⑧ 有朋館

2010年5月8日
附属高等学校中庭



⑦ 実験動物の碑

1999年12月21日
実験動物研究施設前



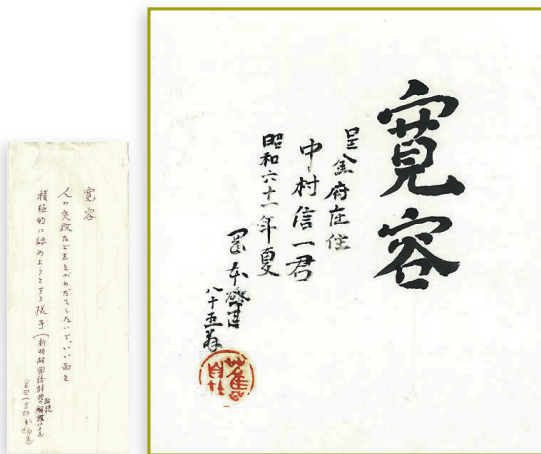


家庭菜園で栽培したキュウリを収穫する（2012年夏ごろ）

自宅の庭で真っ赤な花
を咲かせた、のときリ
シマツツジ



愛犬セラ



金沢大学医学部で著者と研究室が隣り同士だった岡本肇先生(1902～1996)にいただいた色紙。「寛容」とは「人の失敗などをとがめだてしないで、いい面を積極的に認めようとする様子」と説明書きも添えていただいた

渡辺治先生



金沢大学医学部第二学舎（金沢市川崎）に設置された渡辺治先生像は、平成26年3月14日に竣工した。この像は、渡辺治先生（1902～1996）の御寄附に依って建立された。像の制作は、石田陽介（いしだ ようけい）による。像の制作費は、渡辺治先生の御寄附による。像の制作費は、渡辺治先生の御寄附による。像の制作費は、渡辺治先生の御寄附による。

渡辺治先生 記念レリーフ

(文と揮毫：中村信一)

彫刻制作：石田陽介)

宝町キャンパスの総合研究棟に設置。解説文には「本研究棟第Ⅱ期工事は平成24年12月25日に開始され平成26年3月14日に竣工した。工事予算中1億円は金沢医科大学昭和15年卒業の故渡辺治先生の御寄附に依った。ここにこの像を建立し、渡辺治先生の御篤志を永く顕彰する」と刻んだ

身 体		
身 長		cm
体 重		kg
胸 囲		cm
坐 高		cm
架 養		
脊 柱		
視 力		
色 神		
聴 力		
反		
その他の疾病及び異常		

No. _____



昭和26年度

通 知 票

金沢市立千木小学校

学校長	出口 兼 一
担任	松本 操

年 組	第 二 学 年	組
姓 名	中 村 信 一	
姓 氏		

学 期	I	II	III
保 護 者 印			

著者の小学校2年生時の通知票。セロファン紙で補修されている理由は…

序

国語、特に文章を書くことは大の苦手です。小学校四年の頃の日記を見ると、「三時に帰り……それから遊びに行き……七時に夕食を食べ……八時に寝ました」など、事実の経時的記録が大半を占めており、自分の思いに関する記載は極めて少ない。

初めて、自分の思いを書かねばならなくなったのは中学三年の時です。何故か、読書感想文を書くように先生に言われました。なるべく短い作品ということで「高瀬舟」（森鷗外）を読み、感想文を書きました。何を書いたかは全く覚えていないが、相当に四苦八苦したことは間違いない。

次に書いたのが大学入学直後に書いた「受験体験記」です。これは事実を書くだけであるので比較的容易でありました。大学卒業後、論文は基本的には事実を論理的に展開する作業であるので特に困難なことはありませんでした。

私の師匠の西田尚紀先生は旧制四高文科卒業であり、文章の達人でした。私の文を評して「木で鼻をくくったような文だな」。そんな私であるが、時々随筆を書く機会があり、自分なりに思いを表わすよう努めてきました。ある時、とある高名な小説家に運よく出会い。無鉄砲にも「随筆を書くコツは何ですか？」と尋ねました。答えは「事実だけを書くのではない」でありました。何か、ヒントが得られたようで以後、比較的楽な気持ちで書けるようになりました。

「堅い面は一つの面であるが、違う面もあることを伝えることも大事」との言葉に後押しされ、今まで記したものをまとめて一冊の本にした次第です。

平成二十六年三月

中村 信一

個体と普遍のはざままで——中村信一少年の「人生の答案」

金沢大学附属図書館長 柴田 正良

まずはこの随筆集『ボツリヌス菌を訪ねて』の中で、中村信一学長自らの手になる「略歴」を見てほしい。筆者の少年・青年期の伸びやかな姿と、それをいま振り返る眼差しが軽妙さが光る。これは紛れもない、他に代えようのない、一つの個性である。

かつてイギリスの思想家ジョン・スチュアート・ミルは、ドイツの大学者ウィルヘルム・フォン・フンボルトの口を借りて、個性の重要性をこう説いた。

したがって、「すべての人間がたえず努力を向けなければならない目標、他人に影響を与えようとする人であればとくに目を離してはならない目標は、能力と発展における個性である」。その目標を達成するには、「自由と状況の多様性」という二

つの条件が必要であり、この二つが結合して「個人の活力と多様な変化」が生まれ、この両者から「獨創性」が生まれる（ジョン・スチュアート・ミル『自由論』山崎洋一訳、光文社古典新訳文庫、一三〇頁）。

大空に龍のように暴れるムクドリの大群や、海中で一瞬に塊を大きく変えるイワシの大群の中では、個体相互の違いはほとんど無きに等しいものである。人間は違う、と声高に言いたいのが、もし地球上の人類の行動を一万年ほど宇宙から観察したら、その知的生命体は、人間同士の個性の違いもまたムクドリやイワシのそれと大差ないと見るかもしれない。しかしそれでも、人間の個体差が地上において比類なきものであるのは疑いない。人類が一つの種として存在するにはそれに属する個体群を貫く普遍が存在しなければならぬ。個体差としての個性は、普遍の圧力に逆らう力であり、それを偶然が創り出す。

この随筆集の中で人は、一人の典型的な「知識人・大学人の人生」という人間の普遍的パターンと同時に、その普遍から時代や状況や偶然が切り出す、代替不可能な個性に出会うことであろう。一言でいえば、かつて教室で友人の「旅行の友」（ふりかけ）をうらやんだ小学一年生の中村信一少年は、個体と普遍のはざままで成長し、悩み苦しみ、多くの喜

びを知り、時に訪れる身近なものの死に涙したのである。この「人生の答案」を、身をもつて書き上げている間、ひとときも中村信一という個性を失うことなしに……

私もまた、中村学長の関わった小さな偶然の一つである。人文学類長であった当時、附属図書館長でもあったためか、金沢大学創基五十年記念事業の準備委員会委員長の任を学長より与えられ、そのおかげで、教員としては希なささまざまな出会いや出来事を経験させて頂いた。そのなにかの影もまた、薄くはあれ、随筆集の中に映り込んでいる。

さて、どの作品がどうなのかを述べる読者としての私の「独断と偏見」も、私の重要な個性の一つだと許して頂けるだろうか。私の印象に強く残ったのは、まず、中国を始めとする、ポツリヌス菌採取の旅の話である（その中には、毒性細菌が密かに練る、人類との共存戦略という哲学的なテーマもある）。次いで、家庭菜園での奮闘記（なかでも、シナンタロウの逆襲を受ける筆者の姿が秀逸）。さらに、敦煌、サンタ・クロッチェ教会などにまつわる偶然の話（人はだれでも、これほどの偶然に恵まれるものだろうか？）。そして、夏山診療のための白山登山の様子である（淡々とした描写が、かえって登場人物たちの風貌を活写する）。しかし、私が最も心打たれたのは、「愛犬セラ」の話である。その内容は紹介すまい。みなさんに直に読んで頂きたい。筆者の微妙な心の動きが、そのまま、ときに厳しい「学

長」の真の姿なのであろう。

もちろん、誰もがこれほど素晴らしい「人生の答案」を書けるわけではない。しかし、それもまたよいではないか。それが、その人なりの個性ある「人生の解き方」である限りは……

平成二十六年三月

随筆集『ボツリヌス菌を訪ねて』に「賛」を捧げるために記した。

目
次

序

中村 信一

個体と普遍のはざままで

柴田 正良

ボツリヌス菌を訪ねて —— 15

〈日本医事新報緑陰隨筆・炉辺閑話〉

ボツリヌス菌の不思議 —— 27

一九八一年の敦煌 —— 30

白山登山 —— 32

金沢城 —— 34

二十一世紀の科学者像、高峰讓吉博士 —— 36

親父活性化法 —— 38

金沢大学・角間の「里山」 —— 40

- アドレナリン —— 42
- ポトマック河畔の桜の里帰り —— 45
- 医学生を育むのは？ —— 47
- サンタ・クローチェ教会の壁画修復 —— 50
- 小豆栽培に学ぶ —— 52
- 愛犬セラ —— 54
- シナンタロウの逆襲 —— 56
- モグラ退治 —— 58
- 安納芋 —— 60
- 私の畑ライフ —— 62
- 石川県珠洲市 —— 64
- のとキリシマツツジ —— 66
- 細屋ごぼう —— 68
- 我が農園のブドウの木 —— 70
- 石碑「金沢大学誕生の地」 —— 72

サンタ・クローチェ教会の壁画修復完成——74

文久二（一八六二）年——76

金沢大学創基百五十年記念植樹——78

Serendipity〈研究における偶然〉——83

いろいろな偶然——85

三つ子の魂百まで——88

私の英語学習法——90

大切なもの——91

医学士と医師国家試験——94

いい点を積極的に認める気持ち——97

永井富子校長先生——102

受験体験記（ファイティング・スピリットで）——103

昭和四十三年三月三十日——107

記憶に残る一冊「蒼き狼」（井上靖）——110

私の一冊　ファイレンツェへのいざない（流沙）—— 111

ミステリーの宝庫—— 113

細菌の知恵—— 115

細菌との共存—— 117

二十一世紀の細菌感染症の展望—— 119

大山健康財団と私—— 123

〈ともしび（金沢大学白山診療班会誌）〉

留学生と登る—— 131

転法輪窟—— 133

改革の時代—— 136

父と登る—— 139

朋有り遠方より来たる—— 142

やはり晴れ男か—— 145

教訓 — 148

コバケイソウが美しかった — 152

花咲き誇る観光新道を下る — 155

診療所新装なる — 158

日記 昭和三十七年五月四日（金） — 163

略歴 — 164

付録 私と腸内菌の出会い — 169

わたしの勉学時代 — 181

普段着姿の中村信一学長 宮下孝晴

ボツリヌス菌を訪ねて

記憶の中では少年朝日年鑑である。『世界の秘境』の項に「チベット・ポタラ宮殿」が載っていた。先日、近くの本屋へ確かめに行った。本の名前もジュニア朝日年鑑に変わり、社会科統計など数冊に分かれており、いずれにも世界の秘境に類する項はなかった。雑誌『少年』か何かに載っていたのかもしれない。大人になったら是非行ってみたいものだと思っ
心に思った。

高校三年の頃、国語科の八田有親先生（数年前に亡くなられた）に『蒼き狼』（井上靖）を読むことを薦められた。大変おもしろかったので、その他数点を読んだが、中でも『敦煌』に魅せられた。御存知のように、小説『敦煌』では敦煌莫高窟第十七窟に「何故何万巻にも及ぶ夥しい数の經典が塗り込められたか？」が一つの軸となっている。またまた是非行ってみたいと思った。

我々のボツリヌス菌検索の旅は昭和四十九年に始まる。昭和四十八年、筆者の住んでいる石川県の河北潟で多数のカモの変死がみられた。そこで、その原因を究明するため河北潟、その他県内四つの潟についてボツリヌス菌の分布状況を調べた。

ここで、我々のボツリヌス菌検索法を述べておく。土壌中のボツリヌス菌の有無は土壌を培養することにより行い、培養上清液にボツリヌス毒素が証明された時、被験土壌中にボツリヌス菌が存在する、とした。従来のボツリヌス菌分布の研究では、ほとんどの場合、菌の分離は行われていない。我々の研究の重要な方針として菌の分離を行うこととした。

以上の方法で検索した結果、いずれの潟の土壌にもC型ボツリヌス菌が高頻度（陽性率33～90%）に存在し、合計455土壌試料中236試料（52%）でC型毒素が検出された。しかも渡鳥の多い秋のほうが陽性率が高く、渡鳥がC型菌の分布に重要な役割を果たしていると考えられた。また、この研究で神経毒素非産生C₂毒素産生菌を分離することができた。後に、この菌株はC₂毒素研究・細胞骨格研究のため世界の研究室から分譲を依頼されることとなった。

本研究ではC型菌しか検出されなかったが、日本の土壌に関しては他の報告でも、ほとんどの場合C型菌かE型菌が検出されるのみである。日本列島にはA、B型菌は存在し

ないのであろうか？ 検出方法が悪いのであろうか？ 我々はA、B型菌が高頻度に存在することが知られている中国新疆地方と日本の土壤を同一の方法（米国のスミス博士の方法。先の河北瀉の場合と培養方法が少し異なる）で検索することにより、これらのことを確かめることとした。

昭和五十六年十月の末から約二週間にわたって上海第二医学院の協力を得て、中国新疆自治区、甘肅省へ山川講師と二人で土壤採集に出掛けた。

新疆ウルムチではウルムチ市郊外から天山山脈の山あいにある湖、天池までの約100キロメートルの間10地点で採取した。ウルムチからトルファン（約150キロメートル）へは列車で行った。三時間十四分かかって夕方七時三十六分に大河沿駅（トルファン駅）に着いた。駅からトルファン市街まで車で一時間かかった。真つ暗な砂漠を相当なスピードで飛ばし、かつ対向車が接近すると、なぜか、互いにライトを消してしまうのでとても生きた心地がしなかった。トルファンには西遊記で有名な火焰山をはじめとして多数の史跡が点在している。史跡を巡りつつ10地点で土壤を採取した。

大河沿駅から再び列車に乗り甘肅省の敦煌へ向かった。いよいよ長年の憧れの敦煌の地へ行けるのである。列車は十四時間三十分かかって午前九時十五分に柳園駅に着いた。

敦煌までは約140キロメートルである。連絡不十分のため車がない。待つこと四時間、ようやく車が来たと思ったら、途中で故障。順調であれば昼頃着くはずだったのが、午後四時頃ようやく敦煌に着いた。

翌朝（十月二十九日）六時三十分起床。予定では前日の半日と合計一日半莫高窟見学であったのが、この日一日だけとなったためゆっくりとは鑑賞できなかつた。しかし、第十七窟をはじめとして、希望した窟を全て見る事ができた。非常に幸福な一日であった。第十七窟について少し触れておく。第十七窟は一八九九年（一九〇〇年説もある）に王円錬道士によって発見された。発見の経緯については色々の説がある。小説『敦煌』では、王道士が石窟群を清掃中、ふくれ上がった壁面の一部を削り取ろうとして棒で壁土を掻いていたところ、その部分だけ他の壁面とは異なった音がしたことで第十七窟が発見されたと記されている。陳舜臣著『敦煌の旅』では、壁の割れ目につっこんでおいたアヘンの火種線香がすつと奥の方へ入って行き、この現象の原因をつきとめようとして、第十七窟を発見したとなっている。

敦煌の地（莫高窟ではない）でも数カ所ですら採取した。敦煌から、万里の長城西の端、嘉峪関を経て酒泉まで415キロメートル、所々土壌を採取しながら車で移動した。十月

三十日朝七時に敦煌を出発、午後三時十五分に酒泉に着いた。酒泉からはトラブル続きであった。まず招待所（ホテル）に着いて間もなく、役人が来て「甘肅省の土は持つて行つてはならぬ」と言う。我々の訴えは通るはずもなく、せっかく収集した土壤のうち甘肅省の分は泣く泣く捨てることにした。次いで、予定した列車は来ず、そのため蘭州—上海の飛行機にも乗れないことになり、結局上海まで列車で行くはめになった。

十月三十一日午後三時三十六分に酒泉を發つた。乗つた列車は、上海—ウルムチ—蘭州—ウルムチ—酒泉と、上海を出發してから十日以上経つていたため食料はほとんどなく、ある物はウドンだけだった（食料は上海でのみ積み込むとのこと）。本来、この列車は上海—ウルムチ間を八日間かけて往復するもので、積み込んだ食料を食べ尽くしたとのことであつた。我々の持つて行つたカップラーメンが残つていて本当に嬉しかつた。

翌朝九時十三分に蘭州駅に着いた。そこで、全く思いがけないことが起こつた。蘭州生物制品研究所所長（現名誉所長）王成懷教授が「中村先生ですか」と車中へ訪ねて來られた。王教授差し入れの梨三十個、残つていたカップラーメン、ウドンで車内を過ごし、十一月三日午前二時四十分上海に着いた。五十九時間の長旅だつた。

ウルムチの土壤については10試料中7試料（70%）でA型毒素、3試料（30%）でB型

毒素が検出された。トルファンで採取した土壌10試料中2試料(20%)でA型毒素、6試料(60%)でB型毒素が検出された。即ち、確かに新疆地方にはA、B型ボツリヌス菌が広汎に分布していることが確認できた。

同じ方法で再度、日本の土壌におけるボツリヌス菌の分布を検討することにした。昭和五十九年四月、石川県の水田、畑地土壌を採取した。試料は10〜20キロメートルずつ離れた地点で採取した。水田33試料中2試料(6%)、畑地33試料中3試料(9%)にC型毒素が検出された。また、畑地では1試料(3%)にE型毒素が検出された。

この年(昭和五十九年)、熊本県で辛子レンコンによるA型ボツリヌス中毒が発生したため、レンコン田についても検討したが、21試料中3試料にC型毒素が検出されたにすぎなかった。即ち、石川県ではC、E型菌以外は検出されなかった。そこで、大陸に地理的に近い島々には大陸の延長としてA、B型菌が存在するのではないかと考え、中国大陸に最も近い南西諸島、朝鮮半島に最も近い対馬を調べることとした。更に、黄砂が中国からA、B型菌を運ぶ可能性を考え、山陰地方、北九州地方の日本海沿いを調べることとした。

昭和五十九年十二月、南西諸島のうち台湾(大陸と同様、A、B型菌が存在する)に最も近い与那国島、および石垣島、宮古島の土壌を採取した。昭和六十年十一月、車を駆って

山陰・北九州地方、対馬の土壤を採取した。与那国島土壤32試料（約1キロメートル間隔で採取。サトウキビ畑、森）中4試料（13%）にC型、1試料（3%）にE型毒素が検出された。石垣島土壤44試料（約2キロメートル間隔で採取。サトウキビ畑、森、草原）中11試料（25%）にC型、1試料（2%）にE型毒素が検出された。宮古島土壤32試料（約2キロメートル間隔で採取。サトウキビ畑、森）中3試料（9%）にC型、4試料（13%）にE型毒素が検出された。山陰・北九州地方土壤34試料（約20キロメートル間隔で採取。森）中3試料（9%）にC型、1試料（3%）にE型毒素が検出された。対馬土壤35試料（約5キロメートル間隔で採取。森）中2試料（6%）にE型毒素が検出されたが、他の場所とは異なりC型毒素は全く検出されなかった。結局、目指すA、B型毒素はどこにも検出されなかった。ボツリヌス菌の分布は大陸の成立とも関係している。プレート・テクトニクス理論によると新生代（約六千五百万年前）にインド亜大陸をのせたプレートがユーラシアプレートに衝突し、ヒマラヤ山脈・チベット高原ができたといわれる。この時インド亜大陸とユーラシア大陸の間にあった海の生物・堆積物はユーラシア大陸の地殻と共に押し上げられてしまったと考えられている。実際、中国の研究によると、チベット地方には本来的に海岸・湖沼に多いE型菌が高頻度に分布している。

このことを確かめるため、昭和五十八年六月末中国側の協力を得てチベットへ土壤採取に出掛けた（一行十二名）。ラサの衛生部の役人の許可も得て、ラサ近郊、およびラサからシガツエ間（360キロメートル、バスで約十時間）で土壤を採取した。ラサから三時間の距離にあるカンパラ峠（標高4730メートル）でも採取した。しかし、残念ながら、せっかく採取した土壤はチベット税関で没収されてしまった。チベットからは何一つ持ち出しではならぬ、ということであった。今でも残念でならない。

この旅では、行ってみてみなかったポタラ宮殿を目の当たりにし、中へ入ることもでき、感激した。当地における宗教心の厚さには心打たれた。五体投地は強い信仰心がなくてはできる業ではない。幸福とは何ぞや？と改めて考えさせられた。

日本列島の中で唯一異なるプレートにのっていたのは伊豆半島である。伊豆半島はフィリピン海プレートにのってきて三百万年前頃、日本列島に衝突したとされている。それ故、伊豆半島のボツリヌス菌の分布は日本列島の他の部分と異なっているのではないかと考えた。平成元年三月、土壤10試料を採取し検索したが、ボツリヌス毒素は全く検出されなかった。このことは、この地域の成立過程と関係しているのかもしれない。この現象を確認するためには更に多数の地点を調べる必要がある。

E型ボツリヌス菌が河川下流域、湖沼に多いのは、内陸部に存在するE型菌が水流により運ばれ、蓄積したとする考えがある。これをE型菌内陸説と言う。この説の妥当性を検討するため、石川県の最大河川である手取川の河口から山岳部上流域の土壤、更にその水源である白山山岳部の土壤におけるボツリヌス菌の分布状況を調べた。

手取川では下流・上流かわりなく、まんべんなくE型菌が見られ、土壤38試料中13試料(34%)にE型毒素が検出された。白山山岳部土壤では麓から頂上(標高2702メートル)まで登山しつつ採取した土壤15試料中3試料(20%)にE型毒素が検出された。この成績は内陸説を支持するものである。E型菌は湖沼汚泥中で増殖することも知られており、結局、内陸部のE型菌が水流と共に、海、湖沼に流れ込み、その場でも増殖し、海岸(海底)・湖沼が高度にE型菌により汚染されるのであろう。

手取川を調べている時、思いがけず、日本で初めてB型毒素が検出された。四苦八苦の甲斐あり、蛋白非分解性B型菌を分離することができた。本菌の生態は世界的にも全く知られていないが、水系土壤の菌として存在している可能性がある。

ボツリヌス菌の分布には地域特殊性があり、米国ではA・B型、カナダではE型、ヨーロッパではA・B型、中国新疆地方ではA・B型、チベット地方にはE型菌が優位に分布

する。日本列島ではC・E型菌が優位である。この地域特殊性は何に起因するかは分かっていない。微生物を取り巻く環境、即ち地球の造山活動、生息する動物種・植物種、気候、その他種々の自然環境、あるいは人間が作り出す環境が影響していることは確かである。

(日本医事新報『ジュニア版』、324号、一九九三)

日本医事新報緑陰随筆・炉辺閑話

ボツリヌス菌の不思議

一九八六年、ローマで小児ボツリヌス症患者からE型ボツリヌス毒素産生性ブチリカム菌（酪酸菌）が初めて分離された。その後報告はなかったが、一九九四年、中国、江蘇省の黄海に面した連雲港市で、本菌によるボツリヌス食中毒が発生した。一九九八年、今度はインド北西部のアラビア海に面するグージャラート州でのボツリヌス食中毒症例から同様の菌が分離された。

中国で見つかったら、今度はインドかと思っていたが、昨年（一九九九年）、ローマ、連雲港市、グージャラート州を結びつけるのはマルコ・ポーロ（一二五四〜一三二四）の旅行経路であるとの論文（*Clin. Infect. Dis.*;29:1388, 1999）が出た（ポーロが菌を撒き歩いたということではない）。なるほどと感心し、改めてマルコ・ポーロの旅行経路を調べた。

ポーロは一二七一年ヴェネツィアを出発し、ケルマン、カシュガル、ホータン、甘州、上都（開平）、大都（北京）それに秦（長安）、成都、バガンを往復し、杭州、泉州、西都、

インド洋、カリカット（インド）、ホルムズ、ケルマンを旅行して、一二九五年頃にヴェネツィアに帰還している。

中国では、山東省の微山湖の周辺でもこの菌が検出されているので、ポーロはその辺りをも訪れているのかもしれない。ポーロの旅行経路を辿り、土壌を調べてみたいものである。

ボツリヌス菌の分布に地域的偏りがあることはよく知られているが、多くの場合、その理由は明確ではない。中で、なるほどと思われるのは、チベットには本来海と関係するE型菌が多いことに関する説明である。

プレート・テクトニクス理論によると、約六千五百万年前の新生代にインド亜大陸を乗せたプレートがユーラシアプレートに衝突し、ヒマラヤ山脈、チベット高原ができた。この時、両プレートの間にあった海の生物・堆積物が押し上げられた結果、本来は海の菌であるE型菌がチベットに多いとする説である。チベットでは貝の化石がたくさん見られ、納得できる。

日本列島はA、B型菌が多い中国とは一衣帯水の距離に位置するにもかかわらず、中国に最も近い与那国島にもA、B型菌はいない。日本列島ではC、E型菌が一般的である。

なぜか？
不思議である。

(日本医事新報
3979号、二〇〇〇)

一九八一年の敦煌

高校三年の秋、国語の先生に『蒼き狼』（井上靖）を読むように勧められた。ついでに、いわゆる西域物が面白そうだったので何冊か読み、いつか敦煌、楼蘭へ行きたいと思うようになった。

二十年後の一九八一年、幸いにも敦煌行きが実現した。十一月二十八日、柳園から三時間近くのドライブで憧れの敦煌に着いた。宿舎でしばし休憩の後、近郊の月牙泉に向かった。泉のすぐ手前には、東の方向から三角形に見える山（鳴沙山の一部）があり、ここを越えて行くこととなった。この山は完全な砂山であり、一步登れば半歩下がるという具合で難渋しながらも無事頂上に辿り着いた。西の空には太陽が真っ赤に輝き、足元には月牙泉が美しい水面を見せていた。しばし頂上で絶景を楽しみ、月牙泉に面した山肌を滑って泉まで降りた。水面は静かで、夕日に映える山が美しく映っていた。湖畔まで歩み、水辺に立つ事ができた。暮れなずむ中、砂の丘を越えて帰った。砂にはわれわれの足跡だけが

くつきりと残っていた。

翌朝、莫高窟に出掛け、敦煌文物研究所の方の案内で窟を見せていただいた。最初に、念願の小説『敦煌』の舞台の第十七窟に向かった。十七窟は大きな十六窟の入口の右手にあり、数人で一杯になるほど小さなものであった。この窟満杯に経典・書画が八百年近くも閉じ込められていたことを想い、深い感動を覚えた。外にある十七窟の札の下に立ち、記念の写真を撮り（内部は写真禁止）、さらに二百七十五窟（交脚弥勒菩薩）など希望した数多くの窟を一日中見せていただいた。

一九九八年、月牙泉の前の鳴沙山には柵が設けてあり、侵入禁止。また、月牙泉の周囲にも柵があり、侵入禁止となっていた。莫高窟も柵が周囲を囲み、入口には「請勿將照相机、背包、堤包带入窟区」と書かれており、十七窟も立ち入り禁止であった。

二十一世紀、この素晴らしい敦煌が損なわれないことを切望する次第である。

（日本医事新報、4002号、二〇〇二）

白山登山

駿河の富士山、越中の立山と並ぶ日本三名山の一つに白山（標高2702メートル）がある。白山は昭和三十七年十一月十二日に国立公園に指定されており、開山期間は五月一日から十月十五日となっている。特に七月一日から八月三十一日の夏山期間は多くの登山客で賑わい、郵便局、公衆電話が設置され、気象観測が行われ、そして診療所が開設されている。

診療所は室堂にあり、われわれ金沢大学白山診療班は正班員の医師が診療を、副班員の医学生は補助者として診療活動を行っている。この診療班は学生のクラブ活動であることから、医学部教官が部長となっており、平成六年から私が任に当たっている。

部長であるからには、一夏に一度は白山に登らなければならない。いくつもある登山コースの中でも距離が最も短い砂防新道を利用し、さらにその途中から登っているのだが、それでも4キロメートル歩くことになる。スタート地点は標高1550メートル、眺望も

開け気持ちがよく、さあ登るぞという気になる。頂上から迎えに来た学生と一緒に、大体は二十〜三十分歩き、小休憩というパターンで登る。

最初の一時間はブッシュの中を登るので、風もなく無闇に暑く、嫌な個所である。そこを過ぎると眺望も開け、風も吹き、距離的にはまだ三分の一度度しか登っていないにもかかわらず、半分以上登った気分になり、元氣百倍、楽しく歩くことができる。室堂までの所要時間は一年目は四時間十分だったが、以後は四時間を切っている。

パンフレットに書かれている休憩を含まない標準時間は三時間三十分となっているので、人並みということだろうか。この年に一度の白山登山は、私にとっては体力のバロメーターであり、標準時間を保つべく日頃できるだけ歩くことにしている。

白山は信仰の山としても知られ、山頂には白山奥宮があり、石川県からの信仰登山の道として加賀禪定道がある。現在の道は昭和六十二年に整備復活したものであり、距離は18・2キロメートル、下りでも九時間を要すると記されている。何とかして歩いてみたい道である。

(日本医事新報、4032号、二〇〇一)

金沢城

金沢城は文録元（二五九二）年、金沢大学医学部がある小立野台地の突端に加賀藩祖・前田利家の命により、嫡男利長が築城した。そもそも、本丸の場所は尾山御坊が置かれ、一世紀以上に亙り西方浄土を唱える一向宗徒が集まり、一向一揆の拠点となった地である。この城は日本一の雄藩前田家の居城として、二百八十七年間偉容を誇ってきた。しかし、落雷や失火・飛び火による火災がつこう六十九回も発生し、その都度藩主は借財を重ね再建に努めてきた。明治になり藩主が去ってからも、金沢城は御維新に乗り遅れたこの街の唯一の誇りであった。

しかし、明治十四（一八八二）年の軍隊の失火によって、堀め手門である石川門と三十三間長屋を残し、すべてが灰塵に帰した。そして、お城はその後百二十年間もの間、復元されることがなかった。戦後軍隊は去り、昭和二十四（一九四九）年に金沢大学が創設され、そのキャンパスとなった。世界に二つしかない「お城の中の大学」は、多くの若者を魅了

してきた。しかし、さらなる発展にはこの城址では手狭との理由で、大学は平成八年に移転を余儀なくされ、お城は石川県の手に渡った。

県は藩主が住んだ二の丸御殿を守る菱櫓と五十間長屋、橋爪門続櫓を文化五（一八〇八）年焼失・再建の絵図に基づき、地元の匠の技を集め忠実に復元した。平成十三年秋の第十八回全国都市緑化フェア「夢みどりいしかわ二〇〇一」で、そのお披露目がなされた。地元紙は「金沢城、県民に初開放」、「聖域四百五十年、県民に開門」と大きく報じた。

十月のある晴れた日に復元なる平成の金沢城を訪れた。石川門をくぐると広々と視界が開け、伝統技術の粋をこらした優雅なお城が目飛び込んできた。城内中を散策したものの、青春の日々に通った学び舎は見事なほど跡形もなくなっており、心の中にぽっかりと空洞があいた。過ぎ行く日々へのノスタルジアでは決してなく、「知の継承には学び舎の継承も必要ではないか」と、大学人の責任を痛感した次第である。

（日本医事新報、4055号、二〇〇二）

二十一世紀の科学者像、高峰讓吉博士

金沢市には、代々の市長さんが会長を務める「高峰讓吉博士顕彰会」がある。この顕彰会は科学教育の振興を目的とし、半世紀にわたり理科教育に優れた中学校を表彰するとともに、理数科の成績が優れ、かつ研究実績を持つ中学生に高峰賞を授与し、夢を与えてきた。

高峰博士は、加賀藩典医の嫡子として一八五四年に高岡で生まれ、誕生より十二歳まで金沢で育った。幼児から舎密（化学）に造詣が深い厳父の英才教育を受け、藩校で学んだ後、加賀藩から選抜されて長崎に留学した。一八七九年に東京大学工学部の前身である工部大を首席で卒業し、明治政府のエリート官僚となった。活躍を惜しまれつつも数年で官職を辞して実業の世界に身を転じ、人造肥料会社を興した。

その中で、幾多の挫折を乗り越え、タカジアスターゼ（一八九四年）やアドレナリンの発見（一九〇〇年、論文発表は一九〇一年）という偉業を成し遂げた。特許申請により得た巨万の富を日米親善や理化学研究所の創設に惜しみなく投資したことは周知の通りであ

る。

タカジアスターゼは胃腸薬として、またアドレナリンは止血剤・昇圧剤として世界中で一世紀以上もの間愛用され、人類に大いに貢献した。にもかかわらず、高峰博士の名は日本国内においてはほとんど知られていない。折しも、アドレナリン発見百周年に当たる昨年、日本内分泌学会と心血管内分泌代謝学会の共催で「高峰讓吉博士アドレナリン単離精製一〇〇周年シンポジウム―新世紀の科学と創造性」が開催された。さらに、学会では高峰讓吉研究奨励賞、高峰讓吉賞が制定され、各々一名の最先端研究者が榮譽に輝いた。

少年時代の住まいは金沢城の大手門近く（現在のKKR金沢の裏手）にあったという。現在は所在を示す石碑が建っているのみであるが、昨年、金沢城の黒門の近くに居宅の一部が移築・復元された。二十一世紀に求められる科学者像として高峰博士を再評価してほしいとの願いから、風薫る週末の午後この居宅を訪れ、勉学に励む幕末の讓吉少年に思いを馳せた。

（日本医事新報、4083号、二〇〇二）

親父活性化法

厳しかった親父は明治四十四年の生まれであるから、もう九十一歳になる。八十五歳で霊峰白山に登れるほどの健脚であったが、八十九歳の時、自転車で転倒して一カ月ほど入院生活を送ってから、めっきり足腰が弱くなってしまった。

わが家には猫の額ほどの庭があり、所狭しと木々が植えられている。夏、子どもたちが帰省した折、「庭が暑苦しい、何とかならないの？」と言う。改めて観察すると、なるほどその通りで、しかもチャドクガの幼虫もいるらしい。考えてみると、今までは、庭師の真似事をしていた親父のおかげで庭はさっぱりしていた。しかし、今年の父は椅子に座って一向に動こうとしない。下手に枝葉を切ったりすると口喧しいので、何もしないまま放置していた。

これは自分がやるべきと一大決心をし、殺虫剤散布器と高枝切鋏を買ってきた。チャドクガの幼虫を観察し、彼らは横一列にビッシリと並ぶことに変に感心し、虫退治はいと

も簡単に終了した。問題は枝切りで、要領がまったくわからない。基本は下に向かつて伸びている枝（逆枝）および立ち上がっている枝（立ち枝）を切り落とすことということで、仕事に取りかかった。

モミジが最も簡単で、さっぱりと涼しげになった。キンモクセイは本来はこんもりとなるべきところがトラ刈りになってしまった。マキ、モチノキは、枝の先のみ葉を残した「はえたたき」にならないように気をつけて、それなりに仕上がった。

翌日、私の仕事を見ていた父はやおら動き出し、仕上げをやり始め、さらにマツノキの剪定にとりかかった。マツノキの剪定は一年先の姿を予測して枝の芽のところで切るらしいが、さすがに私に触らせたくなかったのであろう。自分が動くことによって動かない父が動き出し驚いた。

毎朝庭を眺めるようになり、一カ月後、トラ刈りのキンモクセイの花が咲き、また、切った枝からみずみずしい新芽が出てきた。生まれて初めて枝切りをした後だけにとっても嬉しかった。

（日本医事新報、4107号、二〇〇三）

追記 明治44（1911）年生まれの父は、平成21（2009）年3月16日に亡くなった（97歳11カ月）。

金沢大学・角間の「里山」

「里山」という言葉は、広辞苑の第四版（一九九一年）には掲載されていない。しかし、第五版（一九九八年）を見ると、「人里近くにあつて人々の生活と結びついた山・森林」と記載されている。してみると、「里山」はどのような新しい言葉であるらしい。

金沢大学は数年後を用途に、医学部を除くすべての学部が角間地区へと移転すべく工事を進めている。角間地区は金沢市の中心にある金沢城公園から東南の方向約5キロの丘陵地に位置し、見映えのする山並みは遠く白山連峰へと繋がる。広さは209ヘクタールであり、単一キャンパスとしては日本で三番目の広さである。角間丘陵はかつては里山であり、谷間では美しい水田が耕され、山では炭が焼かれていた。

金沢大学は敷地の約三分の一に相当する74ヘクタールを「里山ゾーン」と名づけ、森林のまま残し、「里山」として整備の上、管理している。大学の調査によると、角間の「里山」にはカモシカ、キツネ、タヌキ、アナグマ、テン、ウサギ、イタチ、モグラ、野生ネズミ、

ニホンリス、ハクビシンなど十四種の哺乳類が生息しワシ・タカ目に属する貴重種のオオタカ、ハイタカ、ハチクマなど四十七種の鳥類が確認されている。また、約千種（十五日百七十四科）の昆虫と、五百七十六種の植物が観察されている。

この「角間の里山」は、生物多様性に関する国際ネットワーク「西太平洋・アジア生物多様性研究機構」(DIWPA) および「国際生物多様性観測年」(IBOY) の日本国内三サイトの一つに認定されている。

角間の「里山」は二〇〇二年度の21世紀COEに採択された「環日本海域の環境計測と長期・短期変動予測」における重要な研究拠点である。気象や大気汚染物質の観測、森林の持つ環境汚染物質の除去・緩和作用の量的評価などの「環境科学的モニタリング」と昆虫や動植物の「生物多様性モニタリング」とが行われている。

角間の「里山」は、地域住民のさまざまな学習活動のフィールドとしても広く開放されており、大学と地域のインターフェイスとしての役割が大いに期待されている。五月初旬の晴れた日、角間キャンパスへの総合移転が終了した頃の賑わいを想いながら「里山」を散策した。

(日本医事新報、4135号、二〇〇三)

アドレナリン

日本薬局方には「エピネフリン」の名はあるが「アドレナリン」の名はない。両者は紛れもなく同一物質であるが、なぜか第一発見者の命名が無視されて、特許申請を却下されたほうの名称が残っている。各国の薬局方によると、アドレナリンという名称はイギリスやドイツ、フランスで用いられているのに対し、エピネフリンという名称は日本とアメリカで用いられている。すなわち、国際的に統一された名称は存在せず、ややエピネフリン派に有利な状況である。

エピネフリンの命名者はアメリカの薬理学の大権威、エイベルであり、彼はベンゾイル化合物として副腎エキスから不純物を抽出した（一八九七年）。アドレナリンの命名者は高峰譲吉であり、助手の上中啓三がウルピアン反応を導入して、副腎エキスからの純粋結晶化に初めて成功した（一九〇〇年）。上中は結晶化に成功した明治三十三年七月二十一日の実験ノートで以下のように記載している。

「早朝、昨日試験したるアルカリ性となせるエキスを保存したる試験管を検するに、凹底面上疣贅（ユウゼイ）状に集合結晶小塊を見る。よりて注意して上液を傾取しその小塊を水にて処理するに、水には難溶なり。垂留古保留（アルコール）、依的留（エーテル）にもまた同じ。さればその結晶はエキス中に包含する有機酸に結合せるソーダにもあらず、かつ少量にして確定試験を挙行するに由なしと雖もリユーシン、インノーシット等なりとすれば、左迄水には溶け難きの理なしと思えば、腺内物主成分にあらざるなきやの希望頗る強盛となり、その結晶の水にて一回洗浄したるものを一滴の稀塩酸にて溶かし、過塩化鉄を加えしに、ここに始めてヴルピアン反応の鮮綠色を呈するを認む。かく結果の好約束を示すを以て多量の新鮮なる腺を取り寄せられんこと高峰博士に計れり」（山下愛子『科学史研究』、一九六六年）。

エイベルの弟子であるオールドリッチらの追試により、やがて（一九〇一年）、エイベルの方法では副腎髓質の有効成分が分離できず、上中によって純粹結晶化された成分が真の有効成分であることが判明したが、今日に至るまで国際的にはエピネフリン派が主流となつてゐる。

昨年（平成十五年）は高峰博士生誕百五十年に当たり、幼少時代を過ごした金沢では、

記念シンポジウムや法要、茶会、記念式典などの行事が盛大に行われた。また、金沢市立ふるさと偉人館では、博士ゆかりの品や写真をはじめ、エジソンとやりとりした手紙など、多数を展示した特別展が本年（平成十六年）二月までの予定で開催されている。博士の出身地に住み、ゆかりの大学に奉職する者の一人として、わが国の薬局方でも「アドレナリン」とすることを願ってやまない。

（日本医事新報、4159号、二〇〇四）

ポトマック河畔の桜の里帰り

ポトマック河畔の桜を愛でる恒例の「全米桜祭り」が、本年も三月二十七日から四月十一日まで盛大に開催されたとのことである。

この桜は、一九二二年に当時の尾崎行雄東京市長からワシントン市に贈られ、日米親善を祈念して植樹されたことはよく知られている。その実現には日本びいきの旅行作家エリザ・R・シドモア女史（一八五六〜一九二八年）と、金沢出身の世界的化学者、高峰讓吉博士（一八五四〜一九二二年）とが大きな役割を果たしている。シドモア女史は一八八四年に初めて来日し、滞在中、美しい桜に魅せられ、ワシントンに桜を移植する運動を始めた。第二十七代タフト大統領のヘレン夫人に「ポトマック河畔への日本の桜の植樹」を進言し、一九〇九年に受け入れられた。一方、タカジアスターゼやアドレナリンの発見という偉業を成し遂げ、巨万の富を築いた高峰博士は、日米の社交クラブ「日本クラブ」を創設し、ニューヨークの本邸や別荘「松楓殿」を社交場として日本文化を紹介するなど、日

米両国の友好に力を尽くしていた。ヘレン夫人の「桜の植樹」計画を知った高峰博士は、ワシントンの人々に美しい桜をみせるために、相当の費用を負担したとされている。奇しくも、シドモア女史は横浜外人墓地に、高峰博士はニューヨーク郊外のウッドローン墓地に眠っている。

八十年の歳月がめぐり、一九九一年、ポトマック河畔の桜の実生から育てられた幼木四本がシドモア女史の墓の背後に植樹された。美しい花を咲かせるようになった子桜の枝を切って育てた苗木五本が、高峰博士生誕百五十周年に当たる昨年十月、横浜の「横浜外国人墓地を愛する会」から金沢の「高峰譲吉博士ゆかりの会」に贈られた。五本の苗木は金沢市に里帰りし、高峰博士の業績を紹介する「ふるさと偉人館」、博士の居宅の一部を移築した金沢城黒門前の緑地、平成十六年十月開館予定の金沢21世紀美術館、前田家の墓地に程近い大乘寺丘陵公園、および金沢大学に植樹されることになった。

金沢大学では高峰博士の功績を偲ぶ関係各位が医学部の前庭に集い、四月三十日に植樹された。高峰博士の「孫」ともいえるこの桜を愛で、博士の偉業を肌で感じ、国際的な医学者がこのキャンパスに育つことを期待したい。（日本医事新報、4188号、二〇〇四）

医学生を育むのは？

平成十六年九月、微生物学の講義と実習の責務が終わり、区切りとして「後進へのメッセージ」と題する最終講義を行った。その冒頭に医学教育の感想を話し、落ちちはパスツールの言葉とした。

先々の谷教授、先代の西田教授はいずれも講義への出席チェックが大変厳しかった。私もこの伝統を継承し、講義の出席を十七年間にわたり生真面目に取り続けた。これは、医学生にはすこぶる不評であったらしく、出席用紙に「出席を取らないでほしい」と書かれること、再三であった。そこで、出席を取り続けた責任を果たすべく、その意義について試験成績との相関を解析した結果を話したわけである。一言で申せば、試験成績とより相関するのは、講義の出席よりはむしろ実習のレポートであった。

予想通りというべきか、全科目の出席を厳しくした最近の数年では、出席と成績との間には有意な相関が認められなかった。出席を厳しくし、一生懸命出席を促しても、その成

果は決して芳しくないことを示していた。また、長いスパンで多学年の試験成績を眺めてみると、学習環境の改善による効果は一時的にすぎないこともわかった。

例えば、当初は、細菌学、細菌遺伝学、ウイルス学および免疫学の四分野を一日で試験していたが、成績が芳しくなかった。そこで、ある年、試験を二日間に分けて行ったところ、その効果は抜群で成績は素晴らしく向上した。しかし、この効果は数年もたたぬうちになくなった。教育効果を上げるには幾許かの環境の変化を作り出すことがよいことはよくわかったが、これは必ずしも容易ではない。

実習も先代教授にならない、十回程度の実習レポートを一回一回自宅に持ち帰って採点し、必要に応じてユニークな観察の眼をたたえるコメントを加えた。多くの学生はこのコメントには敏感に反応し、実習の回数が進むにつれて、レポートの質は格段に進化した。教科書的特色がないレポートは一重丸、自己の観察力が表現されているレポートは二重丸あるいは三重丸をつけて評価した。その評価と試験成績の関連を解析したところ、全期間を通じ、両者には非常に有意な相関が認められた。

パストールの名言、「幸運の女神は、準備された人の心のみ訪れる」の前には、「観察の分野では」という言葉がある。優れた観察力は、「幸運の女神の来訪」には不可欠の要

医学生を育むのは？

素であることを考えれば、優れた観察力を発揮した医学生の大成が期待される。二重丸や三重丸の多かった医学生が将来どんな臨床医・研究者になり、どんな医学教育をしてくれるかが楽しみである。

（日本医事新報、4211号、二〇〇五）

サンタ・クローチエ教会の壁画修復

ルネサンスの都フィレンツェにあるサンタ・クローチエ教会は、一二二八年にフランチェスコ会士が建てた小さな礼拝堂を源とする、イタリアを代表する教会の一つである。現在の大教会は一三八五年に建設されたもので、教会の左右の側廊にはガリレオ・ガリレイやミケランジェロ等をはじめ、往時を代表する人たちの廟墓が並んでいる。ジョットの壁画「聖フランチェスコの死」は、中央礼拝堂の右手に隣接するバルデイ家礼拝堂に描かれている。

十年以上も前のことであるが、井上靖の『流沙』を読んで以来、サンタ・クローチエ教会の存在と「聖フランチェスコの死」の神秘に魅了されてしまった。『流沙』の主人公は、傷心の旅の途中で「聖フランチェスコの死」の前に立ち、「（この絵は）辛うじて臨終の場面が取り扱われていると判るだけであるが、それでいて、その前に立つ者の心に迫ってくるものがある。しかも、ただならぬ迫り方である」と。この一文がいつまでも脳裏に残り、

一体どのような絵なのであろうかと、久しく思いを巡らせていた。

旅への憧憬を覚える一つの存在にしかならなかったサンタ・クローチェ教会が、昨年、身近なものとなった。東京の篤志家からイタリアの壁画修復のために役立ててほしいと、イタリア滞在十一年の実績を持つ金沢大学教育学部の宮下孝晴教授（イタリア中世・ルネサンス美術史）に寄付の申し出があり、宮下教授、金沢大学、イタリアの三者が協力する事業として、中央礼拝堂の左右の壁面に描かれている高さ21メートルもの巨大なフレスコ画「聖十字架物語」を修復することになったのである。

私はその事業の事前準備のために同教会を初めて訪れることができた。そして、長年夢みていた「聖フランチェスコの死」を目前にし、井上靖の名文を憶い出しなごらばし感動に酔いしれた。

本年四月に工事の足場が組まれてから本格的な修復作業が始まり、五年後の完成を目指し事業は着実に進行している。運命的な事業となった壁画修復であるが、いつの日か、かつての姿を彷彿させる再生なった「聖十字架物語」を心ゆくまで楽しみたいものである。数ある教会の中から、思い入れの深いサンタ・クローチェ教会が修復対象に選ばれた偶然に敬虔な祈りを捧げたい。

（日本医事新報、4239号、二〇〇五）

小豆栽培に学ぶ

金沢大学には60ヘクタールにも及ぶ里山があり、時には熊も出没している。棚田を一部復元してもち米を耕作し、年末には里山活動の締めとして里山メイトが餅つきを行っている。その一助にでもなればと思ひ、わが家の畑に小豆を栽培することとした。

知り合いの中には小豆の栽培経験者がおらず、いろいろと本を探した。大根やキャベツの作り方は出ているが、不思議なことに小豆の栽培法はみつからなかった。インターネッで検索したところ、意外なことに能登半島の先端に位置する珠洲市が小豆の産地で、その小豆は「珠洲大納言」としてのブランド名を得ていることを知った。

早速、珠洲市農協に電話をして栽培法を教えてくださいました。ただ、「珠洲大納言」の種子は入手できなかつたので、「丹波大納言」の種子を買い求めた。

珠洲市農協からいただいた冊子に書かれた栽培法に従ひ、七月中旬に種子を二、三粒ずつ植えた。鳩が食べに来るといふので、面倒ではあるが畑一面に網を張った。数日で可愛

い芽が出てきた。期待に応えてくれたのか、ずんずんと大きくなり、九月には莖長は1メートルにも育つて蔓様に伸び、葉も茂りに茂ってきた。葉誇りというらしい。黄色い可憐な花も咲いてきた。

しかし、そろそろであるはずなのに、一向に莢(実)がつかない。豆類は葉誇りすると莢がつかないと聞いていたので、てつきりそうだと思い、葉を少し切り取った。ところが依然として莢がつかないので、思いあまって農協に再度電話してみた。すると、「花が咲くと、そこからマツチの棒みたいな莢が出てくるはずなんですけど……。葉誇りでもせいぜい先の伸びている所を摘む程度に……」とのアドバイス。そこで、早速先を摘んだが、依然として莢はほとんどついてこない。「おかしいナア?!」。ちょっと焦りを感じてきた。

ところが不思議なことに、十月に入り、コスモスが咲き乱れる頃になると、急に莢がつき始めた。「受粉は暑いと起こらない」ことを、季節の移り変わりが教えてくれた。

十一月初旬には、一応お餅の「あん」を作れる量は獲れることができた。わずか四カ月ばかりの小豆栽培であったが、得るところがあった。文字通り「自然法爾」である。生き物は、すべからく時の流れに身を任せるのがベストなのかもしれないと大納言様は教えてくれた。

(日本医事新報、4264号、二〇〇六)

追記 この後、しばらくして珠州市農協より「珠洲大納言」の種子を分けていただいた。

愛犬セラ

わが家には一匹の愛犬がいる。ミニチュア・ダックスフントで名前はセラという。

八年前の冬、車の中でセラは小さく震えていた。私は、当初、犬を飼うことに反対していた。どうせ先に死んでしまう。その時、悲しい思いをしたくなかったからだ。しかし、妻と娘の猛烈な要望により飼うことが決まり、私は若干複雑な思いでその新しい家族を迎えた。そして、家族全員による溺愛の結果、我儘で気の強い、高飛車な犬に成長した。家のどこにいてもかわからない時、「おい、セラー！」と呼んでも出てこないが、「チーズ食べるかなー！」と叫ぶと、しっぽを振って走り出てくる。面倒くさそうに手をしたり、かわいげのない性格だ。

しかし、私が夜分遅く帰宅して、皆が寝静まっている中でもセラだけは大喜びで出迎えてくれる。その健気さに、私は犬を飼うことに反対していたことも忘れ、完全に愛犬家となっていた。また、わが家に同居している高齢の父母も、特別犬好きというわけではなかつ

だが、非常に可愛がり、心穏やかに接している。セラの吠える声で来客に気づくこともあり、今やセラはわが家で大変重要な役割を果たしている。

ところが、五カ月前のことである。セラの唇に黒い豆のようなものを見つけた。単なるイボだと思ったが、獣医に行った。すると、メラノーマの可能性が非常に高く早急に手術が必要と告げられた。メラノーマだった場合、転移すると余命半年。セラの腫瘍部位からすると転移の確率が70%とのことであった。

突然の事態に、わが家は動転し、嘆いた。セラのいない生活など考えられないのだ。と。りあえずセラは手術を受け、われわれはメラノーマでないこと、転移のないことを祈った。そして、手術から二週間あまり経過し、検査結果が出た。随分と長く感じた二週間であった。検査結果によれば腫瘍はメラノーマであったが、転移はしていないので当該箇所処置をすればすむというものであった。一同、胸をなで下ろした。

「日常」がどれほど貴重なものか、「70%」「半年」といった具体的な数値がいかに恐ろしいか、身を持って感じた。一日一日を大切に生きることを、この生意気な老犬は改めて教えてくれた。

(日本医事新報、4293号、二〇〇六)

追記 末娘が中学2年の冬1月に飼い始めたセラは2013年8月19日に16歳で亡くなった。

シナンタロウの逆襲

わが家の畑には大きな一本の柿の木がある。しかし、長年畑の世話をしていた両親が年老いたせいもあり、柿の木は剪定されることもなく、肥料を施されることもなく、放置されていた。そこで、この荒れた畑が気になった私は、数年前より畑に出かけ、柿の木にも少しずつ手を加え始めた。

ある時、花が咲き、実がつき始めた柿の木の葉が、きれいになくなっていくことに気づいた。犯人は葉の裏にいた。棘をびっしりまとった1センチくらいの黄緑色の毛虫であった。ほんの少し棘だけを葉の縁から出しており、誤って刺されると電撃的な痛みが走る。虫の名は当地では「シナンタロウ」と言い、柿の葉を好んで食する。正式名は「イラガの幼虫」らしい。

美味しい柿を夢見て、せっせと毎朝数十匹のシナンタロウを一匹ずつ鋏で退治していた。そして、ある日、少し高いところの葉についているシナンタロウを捕ろうとしてバラ

ンスを崩し、枝に掴まった。瞬間、柿の枝は折れやすいと言われてるように、見事にポキッと折れて、用水のコンクリートの角に背中からドスンと落下。一瞬、「柿の木から落ちると大怪我になる」が頭をよぎった。脊髓損傷か！と思い、足指を動かした。無事障害もなく背中のみだけすんだ。

その後も毎年シナンタロウを退治し、美味しい柿を食べていたのだが、昨夏、脚立に乗って憎つくきシナンタロウを一匹残らず退治し、意気揚々と脚立から飛び下りた、その瞬間、「ブスッ」と嫌な音がしてふくらはぎに激痛が走った。たいしたことはないだろうと思いつながら、整形外科の先生に診ていただいたところ、筋断裂とのことで二十四時間の冷湿布、四日間の松葉杖生活を余儀なくされた。幸いにも大事にいたらず一カ月で完治した。

まさにシナンタロウの逆襲。いずれも自分の頭の中の思いと身体の動きが連動しないことによる怪我であった。年相応に運動し、作業をするようにと、シナンタロウは教えてくれた気がする。

(日本医事新報、4315号、二〇〇七)

モグラ退治

モグラは穴を掘るのが仕事である。田圃の畔に穴を掘られると水が抜けてしまうので、実に厄介な存在であり、農業にとっては害獣である。私の父はモグラ捕りの名人だった。モグラを捕まえた父の得意な様子が今でも目に浮かぶ。

私は数年前から畑で野菜を栽培している。時折、畑の所々がトンネル状に盛り上がっていったためモグラの存在に気づいた。しかし、トンネルの広がりは大したことがなく、被害もないため放置しておいた。ところが、今年はどうも様子が違い、トンネルは畑の回りを一周し、せっかく丹精込めて造った畝をも見事に横切り、それは凄まじく張り巡らされていた。

モグラがいることはミミズがたくさんいることを意味し、土地が肥沃である証拠と慰められたが、野菜栽培への悪影響を懸念し、モグラを捕まえることにした。

まず、トンネルにはモグラが巢から出る際に必ず通る通勤路があるとのことだったの

で、毎日あっちこっちのトンネルを踏み潰し、修復状態を観察して通勤路をみつけた。そこで、「よし、これで捕獲できる！」と意気込み、筒型の樹脂製モグラ捕り器を十個買って来て説明書の通りにモグラの通勤路に仕掛けた。ところがモグラは、ものの見事にモグラ捕り器を避け、その真横あるいは真下に通勤路を新たに造っていた。数回繰り返したが、結果は同じであった。すると、近所の方が三段式に先端が細くなる筒型のモグラ捕り器を貸してくださった。使いこなしてあり、いかにも捕れそうであったので、早速仕掛けたところ、二日後、モグラがかかった。捕獲の理屈は正しくても、器具がよくないと上手く事が運ばないということだろうか。

生まれて初めてモグラを捕まえ、チョッピリ嬉しい気分を味わった次第である。

(日本医事新報、4345号、二〇〇七)

安納芋

数年前から野菜栽培を楽しんでいる。昨年は当地金沢の名産の五郎島金時に加え、東京のデパ地下で美味しい焼き芋と評判が高い安納芋の栽培にチャレンジした。

四月末日、連休に間に合うように安納芋の原産地の種子島に苗を注文した。二三日で苗が着くとのことであったが、到着が遅れ、ヨレヨレに仕上がった苗がわが家に届いた。こんな苗で植え付くのかと心配になり、再度苗を送ってもらうことにした。ヨレヨレの苗、新鮮でイキイキとした苗を植え、数日観察したところ、驚いたことにヨレヨレのほうが早く植え付いた。ベテラン農家に尋ねると、「サツマイモはヨレヨレでもよく植え付くよ」とのこと。多分、ストレス応答遺伝子が活性化されたせいだろうと納得した。

八月中旬の極暑の中、キッチンと蔓返しをし、九月下旬にはようやく収穫の季節を迎え、一家総出で芋掘りを行った。すると、五郎島金時は苗を植えたところに行儀よく育っていたのに対し、安納芋は想定外の広い範囲に広がって育っていた。したがって、五郎島金時

の要領で掘ると、次から次へと芋を傷つけてしまい、非常に厄介であった。それでも「焼き芋にすると甘くてクリームのように」との言葉を励みに、難渋しながら六十株すべてを掘り起こした。安納芋は五郎島金時に比べ、かなり小振りであったが、それ相応の数が収穫でき、一応栽培成功と満足した。

早速焼き芋にしたところ、実は黄色で、「クリーム」まではあと一歩であったが、評判通りとても美味しかった。掘ってから一カ月以上成熟させると甘みが増すらしい。

野菜は千差万別、野菜栽培はさまざま楽しみを与えてくれる。ストレス解消には最適だろう。

(日本医事新報、4367号、二〇〇八)

私の畑ライフ

私の母親は大正十二年生まれで八十五歳である。元気の源は畑仕事で、自分のつくった野菜を家族が「美味しいね」と食することに喜びを見出している。しかし、年齢を重ねるうちに畑を耕すことが困難になり、そのせいか、自慢のナスも堅くなり、「堅い、どうしてや？」とのつぶやきが増えてきた。母の妹が時々手伝いに来ていたが、なにせ二人とも年齢が齢であり、草が茫々と生い茂る中を少しだけ耕し、細々と野菜をつくるという状態であった。

そこで一念発起、私が畑仕事を手伝うこととした。張り切ってみたものの、数十年振りて手にする鋤での耕しは相当な重労働で、50センチ進んだだけで息が上がったので、鋤での耕し作業はあきらめ、奮発して耕運機を購入した。なんと楽なことか、鋤で一日かかるものが一時間で終了した。

ただ、その後の畝作りは鋤仕事である。農家の方は鋤のみで畝をつくっているが、私は

端のラインをスコップでつくることにした。それでも一応きちんと形をした畝ができた。そして、元肥として堆肥を十分に施し、どうにか野菜らしい野菜を収穫することができた。ところが、私が農作業に携わるようになって二年目の春、よく観察すると土が少ないことに気がついた。どこから、どんな土を入れようかと思案していたところ、運よく近くの川で浚渫工事を行っていた。

「四大文明が発祥したのは川の氾濫により肥沃な土壌を得たことにある」と気づき、浚渫土を分けていただくこととした。10トンの土を運んでいただき、一輪車で畑にまんべんなく広げた。案の定、その効果は大きく、大きなジャガイモや、念願の皮がやわらかく美味しいナスが収穫できた。

母は、毎日私の後についてきて、楽しみに好きな野菜や珍しい野菜を育てている。そして、最近の収穫物は、家族から「美味しい」と喜ばれるようになった。母の手助けのつもりで始めた野菜づくりが、今では私自身のストレス解消法となっている。

（日本医事新報、4398号、二〇〇八）

石川県珠洲市

能登半島は、一九六〇年代前半に松本清張の『零の焦点』で全国に一躍名を知られ、秘境ブームのきっかけとなった地域である。その能登半島の先端に位置する珠洲市は現在、人口が激減し、少子高齢化が確実に進行している。一方、活性化に積極的に取り組んでいる元気な地域でもある。

私が大学に入学した一九六二年、能登半島一周旅行を楽しんだ以降、まったく縁のなかった地域であるが、数年前から家庭菜園で珠洲大納言小豆を栽培し始めたことがきっかけで、身近に感じるようになった。

珠洲市は珠洲大納言小豆の最大の産地であり、JAすずし職員の遠隔指導により毎年かなりの量の収穫が可能となった。この成功に気をよくした私は、二〇〇八年、同じく珠洲市特産のパンダの目のような「パンダ豆」に挑戦したが、「葉誇り」状態となり、収穫なしに終わった。

このように個人的に少し縁を感じていた珠洲市であるが、二〇〇四年に「金沢大学タウン・ミーティングin珠洲市」を開催して以来、金沢大学にとっても重要な位置を占めつつある。

二〇〇六年には三井物産環境基金の支援を受け、珠洲市から廃校となっていた小泊小学校を無償で借り受け、生物多様性の調査研究、里山里海保全活動、環境教育の拠点として「里山里海自然学校」を設立した。

また、二〇〇七年度には文部科学省の科学技術振興調整費の採択を受け、「能登里山マイスター養成プログラム」がスタートし、二〇〇八年には大気観測所・能登スーパースイトを開設した。国連大学高等研究所とも連携しつつ、金沢大学はこれら三事業を一つのチームプロジェクト「能登オペレーティング・ユニット」と位置付け、環境に関する教育・研究の拠点とすることを構想している。

かつて大陸交易の表玄関としての役割を担った珠洲の地は、大学・地域間の連携を通じ国際的教育・研究拠点として今、再び輝こうとしている。

（日本医事新報、4419号、二〇〇九）

のとキリシマツツジ

昨年の春から地元放送局の番組審議会委員を務めさせていただいている関係で、月に一度は、課題テレビ・ラジオ番組を視聴している。昨年の六月の対象番組で能登地方には樹齢百年を超える「のとキリシマツツジ」なる真っ赤なツツジが百株以上もあることを知った。樹齢三百年を超えるものや、樹高4メートル以上の古木もあるらしい。

我が家のツツジは葉の中に白い花が点々と咲いているクラシックなものだったので、庭の彩りに何としても真っ赤な「のとキリシマツツジ」を植えたいと思った。そこで、珠洲市にある金沢大学の「能登学舎」の方にお聞きすると、珠洲市には「のとキリシマツツジ」を栽培している方がたくさんいらっしゃるということで、苗木をお願いすることにした。幸運なことに、十一月中旬に1メートル程度の苗木を二本もいただくことができた。しかし、どのように植え付ければ良いのだろうか。県緑化センターに問い合わせ、赤玉土4・鹿沼土2・ピートモス2・腐葉土2の割合で混合した用土に植え付けた。

冬は雪の重みで枝が折れるおそれがあるため、コモを巻き、大切に育てた。そのせいか、あるいは金沢は能登地方より数度気温が高いせいか、能登地方では五月連休明け頃に咲くらしいが、四月中旬に三本一斉に、美しい真っ赤な花が咲いた。ソメイヨシノのように、葉がなく花だけが咲くツツジだった。十日程度で散ってしまったが大いに楽しむことができた。

ところで、「のとキリシマツツジ」は九州南部から能登に伝えられ、その後、能登の風土に合うように変異したと考えられている。しかし、能登独自の品種が存在する可能性もあるとのこと、品種判定を目的として、この五月、「のとキリシマツツジ」所有者がツツジの枝を持ち寄り、鑑定会が開催されたらしい。花や葉の形状や色合いなどに加え、DNA鑑定も行われたとのことだ。地域活性化のキーワードとして地域ブランドが望まれる時代、能登独自の新品種の誕生を大いに期待したい。

（日本医事新報、4451号、二〇〇九）

細屋ごぼう

輪島市三井町細屋地区は、能登空港から輪島方向へ車で三十分ばかりの山間に位置している。十月（二〇〇九年）の晴れた日、羽田から能登へ飛び、最近ブランド化された「細屋ゴボウ」がいかなるものかを知りたく、栽培現場を訪れた。現場では巨大な植木箱にゴボウが栽培されていた。同行した地元の栽培者、ゼミ学生に色々と説明を頂いた。

「細屋ゴボウ」の種（品種は滝野川）は、どこにでも売られているものとのこと。しかし、細屋地区では白くて太い、柔らかく香り豊かなゴボウに育ち、すぐ隣の地区では普通の黒いゴボウに育つのである。まさに特産品と呼ぶに相応しい。このゴボウのおいしさは「細屋のこんぼ」として地域の人々のみに知られていたのだが、過疎化・高齢化がこのゴボウを世に送り出した。

高齢化により、長いゴボウを粘土質の土壌から掘り出すことが困難になり、それなら盛り上げた土に植えれば、と建設業者が助けに乗り出した。不要になった建築資材で囲った

場所に土を入れ、高さ60センチ、幅1.5メートル、長さ30メートルにも及ぶ巨大な植木箱を作ったのである。ちようど収穫の時期で、少し掘らせていただいた。なるほど簡単に掘れた。白い柔らかい濃縮した味のゴボウであった。

この「まぼろしのゴボウの復活・ブランド化」には金沢大学法学部知的財産法ゼミの学生が広報・宣伝・流通・加工・販路開拓の役割を担い、大いに力を発揮した。知的財産法（商標法）の実務を知るための授業の一環として行ったのである。

実は、我が家の菜園でもゴボウを栽培したことがある。葉は大いに繁ったが、ほんの数センチのゴボウしか採れなかった。しからばと土を60センチほど盛り上げた畝を作り栽培した。しかしながら、結果は同じで数センチの黒いゴボウであり、ゴボウ作りは諦めた。「細屋ゴボウ」と我が家の菜園の結果を考えると、ゴボウは極端に土を選ぶらしい。

「細屋ゴボウ」のブランド化は、異業種の協働、若者の参加がイノベーションの創出に有効かつ重要であることを示唆している。
(日本医事新報、4471号、二〇一〇)

我が農園のブドウの木

我が農園には、ブドウ（デラウエア）の木が一本ある。数十年来、農業に勤しんでいた父母ともに「昔は実がたくさんとれて、人に分けてあげた」とよく言っていたが、同居している私は実がなつているところを見たことがなく、長らく不思議に思っていた。

ところがびっくり、二年前から、たくさん実がつくようになった。家で食べきれず、お裾分けしたほどである。久々についた実の色は、いわゆるブドウ色までには至らず黄緑がかつている程度だったが、香りがあり、とつても美味しいと、差し上げた方からお褒めの言葉をいただいた。十年以上もまったく実がつかなかった原因は、柵の狭さにあると考え、柵を少々拡充したばかりだったものの、突然、実がついたことには非常に驚かされた。

俄然、ブドウ栽培に興味を持った私は、より多くの収穫を目指し、ブドウの木の剪定を行うこととした。インターネットで調べるも、なかなか要領を得ず、ブドウ栽培に詳しい方を紹介していただいた。わずか一本のブドウの木の剪定に、なんとプロのブドウ栽培農

家の方がいらしたではないか。いわく、「ブドウはストレスがかかると実をつけるので、枝を曲げるのです。また寿命が尽きる前に一花咲かすんです。もうそろそろ寿命かも分かりませんね」。

このブドウの木は、父が三十年以上も前に植えたものである。久しぶりに実ったブドウを、父はとっても美味しそうに食べた。そして安心したのか、翌年（平成二十一年）の春、三月十六日に九十七歳で逝った。ちなみに母とブドウの木は、今も元気に生きている。

（日本医事新報、4503号、二〇一〇）

石碑「金沢大学誕生の地」

金沢大学は金沢市郊外の角間地区に位置するが、かつてドイツのハイデルベルク大学とともに、世界に二つしかない「お城の大学」として全国に知られていた。その歴史を後世に伝えたいとする卒業生の熱意が実を結び、金沢城公園の中に「金沢大学誕生の地」の石碑が建立された。

「金沢大学があったという説明書きがどこにもないのは、どうしてだ？」

金沢大学の第三回ホームカミングデイ準備のために二〇〇九年八月、金沢城公園を下見に訪れた際に、私は思わず発した。

この思いは城の中で学生時代を過ごした卒業生に共通するものだったのだろう。「卒業生アンケート」でも「金沢大学が金沢城跡にあった証がないのはさみしい、何とかすべきだ」という声が多く寄せられ、これが私の背を押して、「金沢大学誕生の地」石碑建立を決意させた。

調べを進めていくと「金沢大学があった証」が残せなかった理由の一つに、金沢城跡が「金沢城址公園」とならず「金沢城公園」となった経緯が関係していることが分かった。つまり、観光資源として金沢城を復元するため城址の歴史は城内に残さない、というコンセプトがあったのである。そこで、二〇一二年に創基百五十年を迎える金沢大学の記念事業の中で、一九四九年の新制金沢大学誕生の地を証する記念碑を金沢城公園石川門付近に設置する、と位置付け、石川県との折衝に臨むことにした。国立大学の法人化と創基百五十年を機に活動が盛んになってきた同窓会からの支援と「卒業生の声」が大きな力になり、最終的には「金沢城跡に一定の期間存在した唯一の現存する組織であることを考慮した上で」石碑の設置は許可された。

二〇一〇年十一月六日に披露した白御影石の碑文は、一九四九年から一九九五年までの四十六年間、「幾多の有為な人材を輩出した。この地に金沢大学が誕生し、我が国有数の国立総合大学として発展したことを記し、碑を建立する」と結んでいる。

（日本医事新報、4523号、二〇一一）

サンタ・クローチエ教会の壁画修復完成

金沢大学は二〇〇四年からサンタ・クローチエ教会大礼拝堂の壁画修復プロジェクトを国立フィレンツェ修復研究所、サンタ・クローチエ教会と協力して進めてきた。820平方メートルの壁画修復に六年の歳月を要し、二〇一一年六月六日、その完成式典がかつてのフィレンツェ共和国の議事堂であるヴェッキオ宮殿で開催された。

ヴェッキオ宮殿内の二百人広間で開催された式典では、フィレンツェ市のマッテオ・レソニツィ市長がフィレンツェ市民を代表して、この壁画修復プロジェクトの完成を祝し、イタリア側から日本の関係者諸氏に感謝の意を表した。市長は、次のように語った。

「フィレンツェがルネサンスから五世紀を経て、今なお美しく輝いているのは、大きな災害に見舞われなかったからではない。実際には洪水や戦災など多くの災害に見舞われながらも、時の流れに逆らって必死で生き延びてきた。世界の皆さんがこの町を愛し、共通の財産として、保存や維持のために温かい援助の手をさしのべてくれなければ、この美しさ

を後世に伝えていくことはできない。金沢大学がイタリアと協力しながらこのようなプロジェクトを立ち上げ、十四世紀の壁画修復を遂行してくれた事実は、今日、私の手でフィレンツェ史にしっかりと刻まれる」

本学人間社会研究域の宮下孝晴教授（イタリア美術史）に東京の篤志家から壁画の修復に役立ててほしいという莫大な寄付の申し出があり、それを受けて金沢大学は日伊共同プロジェクトを立ち上げた。当時、副学長であった私は予備調査の段階からプロジェクトにかかわることになり、宮下教授とともに何度もフィレンツェでプロジェクト具体化のための交渉に当たることになった。そして、今回の完成式典に金沢大学長として出席した私は、フィレンツェ市から「フィレンツェの百合」章、サンタ・クローチェ教会とフランチェスコ修道会からは感謝状と記念メダルを授与されるといふ榮譽に浴したのであった。

それはまた、前例のない事業に果敢にも立ち向かった金沢大学の英断に対して贈られた榮譽であり、今後の大学運営に新たな希望と自信が与えられたと言っても過言ではないであろう。

（日本医事新報、4576号、二〇一二）

文久二（一八六二）年

森鷗外は明治四十四（一九一）年、随筆「鼎軒先生」で「私は日本の近世の学者を一本足の学者と二本足の学者とに分ける。新しい日本は東洋の文化と西洋の文化とが落ち合って渦を巻いている国である。∴時代は二本足の学者を要求する、東西両洋の文化を、一本ずつの足で踏まえて立っている学者を要求する」と述べている。日本は東洋の足と西洋の足の二本の足で歩かねばならないということだろう。

森鷗外が生まれた文久二（一八六二）年に金沢大学の濫觴としての加賀藩彦三種痘所（医学部の源流）が設立された。金沢大学は、一九四九年に当時の第四高等学校、師範学校、工業専門学校、医科大学の歴史を引き継ぎ、新生の総合大学として設立され、一九九九年に創立五十周年を迎えた。その折、金沢大学五十年史編纂委員会が設置され、金沢大学の始まりについて検討され、一八六二年に設置された加賀藩彦三種痘所が大学の淵源とされた。

二〇一二年は、種痘所設立から数えて百五十年目の節目の年であり、創基百五十年と位置付け、「先魁」としての人材養成、弱者・少数者を含めたすべての命が豊かに「共存」できる世界の構築、未来における先端的な研究・医療の「創造」の三つのキーコンセプトの下、金沢大学のアイデンティティを具体的な姿として確立するべく記念事業が展開された。二〇一〇年に、金沢城内における「金沢大学誕生の地」石碑建立、翌二〇一一年に彦三種痘所跡地での「金沢大学発祥の地」石碑建立、「アジア五大学学長フォーラム in 金沢」開催、二〇一二年には「金沢大学創基百五十年記念式典」、「金沢大学創基百五十年史」刊行などの事業が行われた。二〇一三年に記念植樹（楷樹）が予定されている。

私は、創立百周年を迎えた一九六二年に金沢大学医学部に入学した。五十年を振り返りつつ、森鷗外の「二本足」、濫觴の一滴であった黒川良安とその門下生の心にあつたに違いない、人類に貢献せんとする「高い志」に思いを馳せ、日々の活動の糧としている。

（日本医事新報、4628号、二〇一三）

金沢大学創基百五十年記念植樹

楷樹はウルシ科カイノキ属の落葉樹で、学名は *Pistacia chinensis* である。

私が初めて楷樹に関心を持ったのは、今から三十年以上前のことである。その時、楷樹が孔子にちなんで「学問の木」、あるいは、幼木では枝振りが乱れているが、成長するにつれて枝振りが整然としてくることから「大器晩成の木」と呼ばれていることを知った。同時に、曲阜にある孔子の墓所「孔林」に子貢が植えた楷樹が代々植え継がれているとのことで、是非訪れてみたいと思った。幸いにも、一九八六年、日本中国国際微生物会議が上海で開催された折、学会参加者と曲阜に行く機会を得た。子貢が植えた楷樹は、枯れた根元だけだが、孔子の墓のすぐ近くに大切に保存されており、当地の人々の孔子への熱い思いを感じた。その後、一九八九年に、全国紙の文化欄に畑和埼玉県知事（当時）が書かれた「カイノキ何の木 歎びの木」を目にし、畑知事に、自分の曲阜、特に孔林についての印象をお伝えした。畑知事からすぐに返書を頂き、楷樹は、北は秋田県から、南は鹿

児島県まで十五都県・二十七カ所程度植えられていることを教えていただいた。我が国における楷樹の広がりには、大正四年に白澤保美博士が、孔子墓所から持ち帰った種子を苗木に育て、湯島聖堂、足利学校、金沢文庫、閑谷学校などに配られたことに始まる。今まで、幾つかの楷樹を見て回ったが、閑谷学校のそれは見事なものであった。聖廟の入口左右に一本ずつ植えられている楷樹は太さ2メートル以上にも及び、紅葉の色映えも一方はより黄色を帯び、他方はより赤みを帯び、圧巻であった。

私の師匠である西田尚紀先生は中国文化に造詣が深く、医学部長時代（一九八一年）に、二本の楷樹を医学部玄関前の庭に植えられたが、数年後、その楷樹は台風により折れてしまった。長らく残念に思っていたが、この度、金沢大学創基百五十年の記念事業として楷樹を金沢大学キャンパスに植樹することとなり、昨年（平成二十五年）十一月二日のホームカミングデイの午前、角間地区に四本、宝町・鶴間地区に二本植えた。

いずれの日か、大樹として育ち、金沢大学の学問の発展を見守ってほしいと願っている。

（日本医事新報、4680号、二〇一四）

追記 — 学問の実りあれかし楷新樹 —

Serendipity — 研究における偶然 —

本学医学部薬理学講座・第二代教授岡本肇先生（一九〇二—一九九六）は、一九五七年に「核酸による溶血性連鎖球菌の溶血毒増産現象の発見について」の研究で栄誉ある学士院賞を受賞された。本年は先生の生誕百周年にあたる。

先生は研究室が隣同志であったよしみで私の研究室へしばしばお越しになり「研究には by chance 型と、こう考えたら果たしてこうなった型があり、by chance 型が重要である」旨のお話をされていた。

一昨年、ノーベル化学賞を受賞された白川博士はストックホルムでの授賞式で「東洋からきた Serendip の王子様」と紹介されたと報じられている。また、昨年ノーベル化学賞を受賞された野依博士は、座談会で研究における Serendipity の重要性について話されている。Serendipity とは、「何かを目指している最中に、偶然に、智慧の働きによって全く別のすばらしい発見がなされること」を意味する。二十数年の歳月を経て、岡本先生の「by

chance」とは Serendipity に他ならなかったことをようやく知るに至った。

今日、「こう考えたら果たしてこうなった」型のプロジェクト研究が全盛であり、多額の研究費が費やされている。本年度に始まった「21世紀COEプログラム」もプロジェクト研究であるが、その中で生じる Serendipityこそが科学のブレークスルーにつながるものである。

偶然を見逃さないセンスを、岡本先生の警咳に接することがなかった若い世代に継承できればと願う今日この頃である。

(月刊アカンサスニュース、70、二〇〇二)

いろいろな偶然

昨年、六年ぶりに日本人がノーベル賞を受賞した。化学賞を受賞した下村脩博士は受賞について「偶然の幸福」と述べている。

金沢大学医学部薬理学講座・第二代教授岡本肇先生（一九〇二～一九九六）は、昭和三十二年に「核酸による溶血性連鎖球菌の溶血毒増産現象の発見について」の研究で栄誉ある学士院賞を受賞された。先生は研究室が、偶然に、隣同士であったよしみで退官後も私の研究室へしばしば来遊され、含蓄のある言葉を残された。ある日、私は先生に「研究者として合格点とは一体いかがなものでしょうか？」と、恐る恐る尋ねてみた。すると先生はしばし黙され、「大学卒業後十年間に十一編のトップオーサーの英語原著論文を発表すること。十編では合格ではないね」と、お答えになった。またある時、「研究のやり方には by chance 型と、こう考えたら果たしてこうなった型があるが、by chance 型が重要である」という旨のお話をされた。確かに、先生の論文の中に「RNAによる溶血性

連鎖球菌の溶血毒増産現象の発見は by chance であった」との記載がある (The Study on RNA-effect was started in 1939, when Okamoto by chance observed the appearance of enormously large zones of beta hemolysis……. Jap. J. Microbiol. 11 (4), 323-336, 1967)。先生が「by chance」は「偶然」を意味すると思われるが、自然科学の大発見には「偶然」を伴うことが少なくない。

医学上の大発見の一つであるペニシリンは、青カビがシャーレに舞い込んだという偶然の賜物であり、フレミングの眼力が目指していたものを見逃さなかったのである。マーシャルによるヘリコバクター・ピロリの発見や、平成十四年のノーベル化学賞の田中氏の「質量分析のための脱離イオン化法」も同様である。

一方、平成十二年にノーベル化学賞を受賞された白川博士は、「アセチレンの粉末を合成しようとして、あやまって千倍もの触媒を使い、そのためにアセチレンの薄膜が合成され、このことが大発見に発展した」と述べている。この場合は前例とは異なり、「何かを目指している最中に、偶然に、全く別の画期的な発見がなされた」ものである。このような発見をセレンディピティーと表現するらしい。平成十三年にノーベル化学賞を受賞された野依博士も研究におけるセレンディピティーの重要性について話されている。

フランスの偉大な細菌学者ルイ・パスツール（一八二二—一八九五）は、これらの「偶然」を総じて「Le hasard ne favorise que les esprits préparés.（幸運の女神は、準備された人の心へのみ訪れる）」と表現している。これは、目標に向け努力すること、そして日々の研鑽により「偶然」の機会を見逃さないセンスを養うことの重要性を示している。我が身における偶然を顧み、「偶然」について再び考えさせられた次第である。

補遺

昭和二年七月に金沢医科大学眼科の山田邦彦教授が丹毒で亡くなり、細菌学の谷友次教授が溶連菌を分離した。その年の春金沢医科大学を第一期生として卒業された岡本肇先生は、谷教授が分離した溶連菌を用い、連鎖が伸張することについて研究を進められた。そして昭和十四年六月、偶然（by chance）、「リボ核酸による溶連菌のストレプトリジンS増産現象（核酸効果）」を発見された。岡本先生はさらに、その溶連菌を使って制がん剤の開発を推し進め昭和四十三年二月に溶連菌製抗がん剤「OK-432」（商品名ピシバニール）を完成された。OK-432は開発から四十年経った現在もがん性胸水や頭頸部がん等の免疫治療においてがん制圧に貢献している。

(BIO Clinica、25〈1〉、110-110)

三つ子の魂百まで

幼児教育と聞くと、自分の記憶と相俟って、反射的に「三つ子の魂百まで」が思い浮かぶ。

この言い伝えは、経験から生まれたものであるが、最近の脳科学の進歩により、幼少時の脳は目覚ましく・急速に発達することが明らかにされ、「三つ子の魂百まで」が証明されつつあるようである。また、近年、生後二〜五日の赤ちゃんが（普通と逆さ読みする言葉を聞き分けている事実から）言葉に反応している事が明らかにされた。いってみれば、赤ちゃんはお腹にいる時から言葉を聞いており、語りかけることなどが、胎児に良い影響を与えるとの考えを支持しているように思われる。さらに就学前の良い教育環境は、学習意欲を高め、学力の向上に効果があると報告されている。

一方、科学技術政策研究所が平成十五年に行った国際級研究人材（国際的科学賞受賞者など）へのアンケート調査では、自然に触れることが子供の好奇心を育み、伸ばす上で重要であることが指摘された。自然に触れることの重要性について、脳研究学者の小泉英明

先生は「意識下の部分をきちつと育んでいく。これは例えば昔だったら、原っぱというのはどこにでもあったが、原っぱというのは決して無意味な空間ではなくて、そこでいろいろと、いろいろな創造性を発揮して子供達が遊んでいた。そういう意味でこれはやはり素晴らしい遊びではないかと思う」(NHKクローズアップ現代、二〇〇六年)と語っている。

この春、小学校二年の子供と小川でザリガニ捕りを行った。小さいザリガニが数匹捕れた。子供は「どうして大きなザリガニはいないの?」と尋ねてきた。考えてみれば、確かに昨秋には大きな親ザリガニがいた。教えなくても「なぜ?」と問う好奇心を子供は持っていることを改めて認識した。また、ある時、小川の水を堰き止めるため板を土管に当て、板の端の方に小さい渦巻きができるのと、何度も何度も板を入れたり外したりして「渦巻き」のできる様子を観察していた。まさしく好奇心の固まりである。このような好奇心の固まりをスクスクと育てるのはわたしたちの責務である。大きく育った好奇心の固まりが、たとえ途中受験勉強などで沈むことがあったとしても、成人してからの課題探求能力、課題解決能力の源泉であると確信している。

「三つ子の魂百まで」の精神、自然の中での遊びが子どもの成長に重要な意味を持つのではと思っっているこのごろである。

(幼稚園じほう、41(8)、二〇一三)

私の英語学習法

大学院三年の時縁あつて米国へ留学した。当地には日本人は一人もいなかったが、そのことが幸いした。どの様な発音でも英語を話さなければ意思の疎通が出来ない立場に追い込まれた訳である。このような情況で英語を話し始めたのであるが、自分の英語でも通ずることが判った。まわりにはフランス語英語、ドイツ語英語等、様々な英語があつた。英会話上達のコツは、非常に簡単なことであるが、日本語英語でもよいから先ずは口に出して話をする事であると気付いた次第である。素晴らしい英語に近づく努力をすることは当然の事であるが。

(金沢大学 英語学習ハンドブック、二〇一二)

大切なもの

「The Best Thing in Life is a Friend (生涯のこよなき宝もの、それは友)」

生涯のこよなき宝もの、

その一つは友

至る所、誰にでも見つけられる宝もの

君の最善のものを引出す為

友は手助けする

最善だって最悪だって

どちらでも良いのサ

友はどちらだって受け入れているんだから

悲しい思い出の中、友の肩に寄りかかり、心の声を聞く

友がいつも君のことを氣遣うことを知っているからね

君が助けを必要とする時、

友は手を差し伸べる

君が順調なら友は何もせず只、

君の友であることに満足

君の幸せを知るだけで充分

笑いに興じたその時々

すべての時に友の影がある

涙が必要な時、友は涙だつてくれる

つまり、何もかも判っているんだナ

我が友よ、今ここで述べた全部が

君にあてはまる

だから君が必要とするどんな事だつて私も周りの友も

君を温かく見守る。

マリア エレーナ 西田尚紀訳

英国の有名な大学にオックスフォード大学とケンブリッジ大学があります。それらの大学の校是は、一 スポーツ、二 スポーツ、三 スポーツ、四 友情、五 勉学です。「スポーツをして、友情を育てよ、その上で勉強せよ」ということです。つまり、最も重要なことは友情を育むということになります。

教養教育は百害あって一利なしということで、多くの大学で教養部が解体されました。しかし、最近、医学教育において人間性の涵養の視点から教養教育の重要性が再び叫ばれており、全国の各大学は右往左往しています。先日（平成十二年七月二十六日）「教育改革国民会議」は「将来は満十八歳までに一年間の奉仕期間を設定」との報告書を発表しました。人間性を養う教育が「右にならえ」で一斉に行われるとしたら、それは恐ろしいことです。医師には豊かな人間性が求められることは当然のことですが、人間性は教育というよりむしろ体験的に、自らが主体的に求め学ぶことにより養われるのではないのでしょうか。

（躰、7号、二〇〇〇）

医学士と医師国家試験

第九十四回医師国家試験（二〇〇〇年四月二十日発表）の合格率は新卒82・9%、既卒58・4%、合計79・1%で、一九八五年に試験が年一回の実施になって以来、最低であった。いわゆる国試浪人が本年の国試まで少なくとも千三百八十二人いて、合計で少なくとも千八百六十九人いることになる。

医学部医学科を卒業すると医師国家試験受験資格があり、最近はずべての卒業生が国家試験を受ける（以前は例外的ではあるが不受験者もいたらしい）。合格すれば医師免許が与えられ、医療に関するすべての行為が可能となり、医師として活動することができる。逆に不合格者はそれまでの努力のすべてが否定されてしまい、場合によっては落伍者の烙印を押されてしまう。他の学部については、例えば薬学部を卒業すると薬剤師国家試験受験資格があり、卒業生ほとんどすべてが受験する。不合格者も結構いるが、薬剤師の免許がなくても種々の職場で活躍している。教育学部は基本的には教員養成の学部であり、必要

な単位を取得すれば卒業時には教員免許を取得することができる。しかしながら、すべてが教育の場で職を得ているわけではない。ちなみに本学（金沢大学）の場合、非常勤も含めて教員となっている者の割合は30〜40%であり、多くは他の職種を得ている。ところで、医学科卒業生、医学士の資格で社会が受け入れる素地はいかがであろうか。本学の卒業生の一人が現実に遭遇したことを述べる。本人は数年、数回、国家試験を受けたが、すべて失敗した。両親は医師となることを諦めて働くべき場所を探したが、結局「医学部を卒業して国家試験も合格できない者はどうもね」ということでいずれも断られてしまった。すなわち、医学部医学科を卒業しても国家試験に合格しなければ社会は受け入れないのが現状ではないだろうか。幸いにも本人は、この経験をバネとして一念発起し翌年には合格し、現在立派な医師として活躍している。

一九四九年から一九六九年までは医学校（医学部、医科大学）は四十六校であり、入学生定員は一九六六年以降少しは増加したが、一九六九年でも四千四十名に止まっており、国家試験合格率もほぼ100%であり、卒業生はよほどのことがない限り合格した。医師不足ということで医学校の新設が一九七〇年（秋田大学医学部など）から始まり、一九八一年（琉球大学医学部）まで続き七十九校となった。さらに既設の医学部においても定員増

が行われ一九八一～一九八四年には入学定員は最高の八千二百八十名となった。その直後の一九八六年には、医師数の過剰が予測されることから入学定員の削減が論議され、その後入学定員は減少に転じ、二〇〇〇年度には入学定員は七千五百五名となった。国家試験（一九八四年まで春、秋の年二回行われた）の合格率は医学学校の新設が始まる前の十年間（一九六一～一九七〇年）は春・秋の合計で平均95・8%（91・6～98・0%）であったが、新設進行中の一九七三年以後合格率は90%を切り、一九七一～一九七五年の春・秋の合計合格率は83・1%（75・3～95・2%）に低下している。最近の十年間（一九九一～二〇〇〇年）は平均86・1%（79・1～90・0%）である。ちなみに一九九〇年から試験が一年一回になった一九八五年まで遡つての合格率は平均84・6%（81・2～88・0%）である。医師の需給関係の合格率への影響は微妙なところである。

医師数の削減策には入口論（入学定員数削減）と出口論（国家試験）など、種々議論されているが、上に述べたように、国家試験に合格しない医学士（衛生検査技師の資格有り）は社会的に認知され難い現状、また国家試験が資格試験であることを考えると、出口論以外の方法（入学定員数の削減、入学後の厳正な成績判定による進路変更など）で削減を考えるほうがいいのではないだろうか。

（治療学、34（8）、二〇〇〇）

いい点を積極的に認める気持ち

■ 教室について

金沢大学医学部に細菌学の名前が初めて現われるのは明治四十五年である。教室の名称は昭和二十九年微生物学と改称された。教室の集會室には歴代の上田計二、児玉豊次郎、谷友治、西田尚紀各教授の写真が掲げられている。谷教授は大正十四年から昭和三十四年までの三十四年間、西田教授は昭和三十四年から昭和六十一年までの二十七年間の永きにわたり教室を主宰され優れた業績を挙げられた。谷教授は「実験梅毒の研究」で昭和三十一年、西田教授は「*Clostridium* の taxonomy に関する研究」で昭和五十一年に浅川賞（日本細菌学会賞）を受賞されている。先任の西田教授が昭和六十一年三月に停年退官され、同年五月に小生が教授に昇任し教室を受け継いだ。

教室の陣容は教授一、助教授一、講師一、助手一、大学院一、専修生七、技能補佐員一、事務官一名であり、その他臨床教室から数名がスタッフと共に研究を行っている。

主な研究対象は病原性クロストリジウム（破傷風菌、ボツリヌス菌、ウエルシュ菌、ディフィシル菌等）、麻疹ウイルスである。種々のクロストリジウムについて生態、分類、生理、毒素原性、毒素の作用機序等幅広い研究が行われているが、ここ十年程は偽膜性大腸炎や抗生物質関連腸炎（下痢症）の原因菌であるディフィシル菌（*Clostridium difficile*）、ボツリヌス菌の土壌における分布が主研究テーマとなっている。ディフィシル菌に関する研究は患者・健康者糞便より菌を分離することから始まり、生理学的、毒素学的研究に発展している。ボツリヌス菌の分布の研究は昭和四十八年に石川県の河北潟で多数の鴨の死骸が見つかったことに端を発する。その後、中国大陸に近い南西諸島（与那国島、石垣島、宮古島等）、黄砂の多い山陰地方・九州北部、中国新疆自治区、ケニア、パラグアイ等の土壌を同一の方法で調査し、「日本列島はC、E（型ボツリヌス菌）列島であつて、（中国大陸に多い）A・B型はほとんどいない」ことを明らかにした。その研究の途次、C₁毒素（神経毒素）非産生・C₂毒素産生C型菌が分離され、この菌は現在世界各地の研究室でC₂毒素産生菌として広く使用されている。また、蛋白非分解性B型菌が我が国で初めて分離された。麻疹ウイルスの研究については本誌〔研究室 Report〕を参照していただきたい。

前述の研究に見られるように、研究の原点はフィールド、臨床の現場であることを念頭

に置き研究を進めている。

■あるがままにみる

子供は些細なことにも疑問を持つ。学習・経験を通じて知識が増えてくると知識で判断し、常識が幅をきかすようになる。あるがままにみていると思っても、無意識に知識が働いてしまう。いかに「あるがままにみること」ができるかが研究上の分岐点となる。

■医学への志

昭和四十年代に医科大学が多数設立された。当時、近い将来医者が溢れ基礎医学専攻者が増えるであろうと考えられた。しかし、その予想は見事に外れ、基礎医学専攻者は一向に増えずむしろ減少している様に思われる。これは一つには医学の急速な進歩により医学の細分化・専門化が加速度的に進行し、新しい需要が作り出されたためであろう。他の大きな理由としては世の中の価値観の変動、金権思考の横行を挙げることができであろう。それは多分旧来の価値観が木っ端微塵に粉碎された第二次大戦終戦後に起こったものであろう。そして、東京オリンピック（昭和三十九年）の頃より姿を現わし、ここ数年最高潮

に達した。

数年前に学部一年生の第一回目の講義で「医学部への進学理由」を無記名で書いてもらった。70%が「医者になりたい」、10%が「医学研究をしたい」と答え、残り20%は目的意識が希薄なまま進学していることが分かった。また「医者になりたい」理由として二名のみが「経済的に恵まれているから」と答えており、金権思考に毒されていない様子で安心した。後に、学生達と親しく話をすると「先生、いくら無記名でも本心は書きませんよ。まあ、90%以上は医者は収入が良いからですよ」と言われた。確かに早く体制に入りこもうとしている学生が多いように感じるが、そんなことはあるまいと思っ
ている。

昨年十二月下旬の各新聞に国立・私立大学の授業料値上げの記事が出ていた。それによると医学系以外については私立大学の授業料は国立大学の二倍弱であるが、医学系では十
〜二十倍である。これは医学系への進学には本人の能力以外の因子、親の経済力が大きな
因子として働いていることを意味している。政府、医学界が力を尽くして私立医学系の授
業料を他学部なみになる様努力することが望まれる。

先のアンケートで20%の目的意識希薄者の中では学業成績により医学部へ来たとする

者が圧倒的に多かったが、偏差値万能の世の中では止むを得ぬことかもしれない。

■教育

実習の途中に顕微鏡、実習ノートを置いたまま行方不明になり、全員が終わった頃に汗をふきふき帰っていざ実習を始めようとした学生がいた。「クラブをやっていた」と言う。叱ったら泣いた。「今まで叱られたことは一度もなかった。叱られて嬉しかったんです」と言う。また、実習中に散髪屋へ行っていた学生も注意をしたら泣いた。いずれにも共通しているのは泣くこと、自分の行為が良くないことだとは知らなかったということ、素直に直すことである。更に、先のアンケートに見られたように研究指向の学生が相当数いることにも注目せねばならない。加うるに、彼らは、特に学部四年になると実によく勉強する。これらのいい点を積極的に認める気持ちが大切なことではないかと思っている。

(治療、74(4)、一九九二)

永井富子校長先生

千坂小学校の記憶の中でも最も鮮明なものは六年の時に赴任された永井富子校長先生の御挨拶です。「昭和三十年九月三日土曜日天気晴…吉本校長先生は先生をやめました。その代わり校長先生には石川県初めての女の校長先生、永井富子先生がなりました。その声はまるで男そっくりの声であったのでみんなわらいました。…」これは私の保存している日記の記載です。数年前、永井校長先生が高名な寄生虫学者T先生の奥様の御母堂さんであること、T先生が千坂小学校の寄生虫検査をされていることを偶然に知りました。このような集団検査は日本初であり、検査結果は昭和三十二年の第二十六回日本寄生虫学会で「蟯虫の予防対策に就いて」と題されて報告されています（寄生虫学会誌、第六巻、第3・4号、34ページ）。この研究は蟯虫の予防における衛生知識の普及の重要性、ピペラジンの有効性等を検討したものであり、その後の蟯虫対策に大変役立ちました。即ち千坂小学校は我が国の蟯虫症撲滅に大きな貢献をしたと言えます。

（あゆみ 千坂小学校五十年のあゆみ Chisaka Junior School' 15' 110011）

受験体験記 — ファイティング・スピリットで —

勉強をする場合、次の六つの事に留意しました。

- 一、計画は無理なものを作る。
- 二、常に先回りする。
- 三、短時間に勉強する。
- 四、参考書は学校で与えられるもので充分。
- 五、授業時間は質問の時間である。
- 六、他人は他人、自己は自己。

特に三年の時について話を進めましょう。

第一の点について私は夏休みで、受験体制の確立という計画をたてました。

第二の点については春休みに三年の予習を終えてしまいました。本当に全くただ予習だけをしました。その予習ですが私は国語が特に苦手だったので、次のような方法を採用しました。

(主に古文) 先ず文をノートの上段に写し、次に辞書で調べて自分の解釈を下に書き、疑問の点は質問しました。そして受験勉強の時間を作りだしたのです。予習がしてありますので、家に帰れば受験勉強さえすればよかったです。古文の受験勉強は、徒然草、大鏡を徹底的にやりました。つかれましたね。

第三の点について私は自称「短時間注意集中法」を採用しました。それは注意集中を行って一つの科目を比較的短時間(一時間)だけ勉強するのです。問題は注意集中力でした。それには規則正しい生活をする事です。最初の内は、目、耳を用いました。書くことは時間の不経済で、第三の原則に反するので用いませんでした。自分で読み、そして聴くのです。毎日続けると遂には読むだけで注意集中力がつき、理科、社会の教科書は一時間で200ページは大体完全に理解、暗記できるようになります。この集中力は国、英、数にも非常に役立ちました。

第四の点について、何の不安もなしに、教科書中心にやりました。自信をもっていえる事は理、社、数については学校で与えられたもので充分だということです。それらをくり返しくり返し徹底的に行いました。第五の点について、一、二、三年全て言える事と思いません。前の日に必ず予習をして来て、授業時間には自分の疑問の点のみを充分に聴きました。三年になっては特に、一時間一時間が受験勉強であるとはつきり自覚して授業を受けました。六番目の事について、他人は一般に本当の事は言わないものである。他人の事に気を取られたり、他人を怖れたり、他人をうらやんだりする事は百害あって一利なしである。以上述べた事の中に共通した一つの精神が貫かれています。その精神とは「ファイティング・スピリット」であります。最初は私も他へのファイティング・スピリットを持って勉強しました。しかし次第にそれは自己へのものへと変化していきました。自己の内面との戦いなのです。

■次に具体的なことについて

一学期は基礎を教科書で作りました。時間は夕方六時半から十一時までの間です。夏休みは、午前中は数学、午後には社会、理科、夕方は国、英をしました。昼は暑さを考え、

頭の回転にふさわしい科目を選んだのです。化学、物理は基礎の公式を完全に理解することを第一としました。数学については少し油断しました。決して油断せずに毎日必ず規則正しくして下さい。二学期はある事情（追記 急性糸球体腎炎発症）で本当に自分のウィークポイントだけをpushさえました。三学期は又教科書だけで最後のしめくりをしました。私は点の取れる科目で、確実に点を取る事にしました。又自分のいわゆる得意科目には、あまり時間を費やしませんでした。何にしても一学期は教科書で基礎をつけ、夏休みには応用力をつけ、二学期にはウィークポイントを押さえ、三学期には教科書でしめくくる。私はこの様にしました。さらにこまかい事については書き尽くせませんので省略させていただきます。（筆者は昭和三十七年三月卒）

（二水新聞、第51号、一九六二）

昭和四十三年三月三十日

我々は医学部創立百周年の昭和三十七年に入学し、インターン制度が廃止され登録医制度が始まった昭和四十三年に卒業した。昭和四十三年は、明治維新百周年でもあり、区切りの学年とすることができると言える。

当時、全国的に登録医制度反対運動が展開され、我々も制度粉碎を主張して最後に残っていた二科目の卒業試験、二月二十四日の麻醉学および二月二十九日の神経精神医学を全員欠席した。私も同級生数人と神経精神医学講座の大塚良助教（島蘭安雄教授は東京医科歯科大学教授併任で不在であった）に試験欠席を告げに出向いた。三月五日の北國新聞は「卒業試験を一斉欠席 真っ向から反対の『学四』の見出しで卒業試験欠席に関連してほぼ一面を費やして報じている。その後、三月十五日には試験を受けることとし、三月二十一日に神経精神医学、二十三日に麻醉学の卒業試験を受けた。しかしながら、三月二十五日の卒業式（卒業証書の日付は三月二十五日）に出席することは出来ず、その日は

大 金

医学部ぬきで卒業式

試験拒否たたる

まだ追試の必要も

一学部全員の欠席は初めて

卒業式

死ぬ気?で飛び降りて

高留置二階留置場から

1968 (昭和 43) 年 3 月 25 日付北國新聞朝刊

片山津温泉で自主卒業式を行った。三月二十五日の北國新聞は「医学部抜きで卒業式 試験拒否たたる まだ追試の必要も 一学部全員の欠席は初めて」の見出しで卒業式について報じている。卒業証書は最終的には六月に学生係から渡された（卒業証書の日付は三月

三十日）。以来、四十三年が経過した。

当時の教授会記録および評議会記録には「卒業試験一斉欠席した」旨の記録はない。また、恐らく、卒業試験について議論していたと推定される医学部補導委員会記録および全学補導委員会記録は保存されていない、議論の有無は不明である。卒業証書の授与に関しては、昭和四十三年六月十日付で医学部長から学長に「卒業証書の

授与について（申請）このことについて、別紙学生は医学部規定第七条に定める規定により合格したので、金沢大学通則第六条により昭和四十三年三月三十日にさかのほり卒業証書を授与くださるよう申請します」と記載された発医第二七三号が提出され、六月十四日付けで学長から医学部長に「卒業の認定について 六月十日付けの発医第二七三号による別紙学生の卒業について、申請のとおり施行差支えないので通知します」と記載された書類が返されている。

当時の改革精神は同期生全員の今を支えている。

昭和四十三年当時の北國新聞記事を検索して頂いた北國新聞社社長 高澤基氏に深甚なる感謝を表します。
（金沢大学医学部創立百五十周年記念誌、二〇一二）

記憶に残る一冊「蒼き狼」(井上靖)

高校三年秋に先生から薦められた、成吉思汗の生涯を描いた歴史小説です。キカン子の私に生き方を勉強せ！との気持ちで薦められたのだと思います。先生の意図された方向とは異なりますが、その一冊から私の夢は広がりました。巻末に紹介されていた「敦煌」を読み、どうしても敦煌に行きたいとの夢を持ったのです。その夢が大学卒業後の生き方に大きな影響を及ぼしたように思います。さらに、その一冊は井上靖の世界に自分を導き、様々な夢を与えてくれました。金沢大学の「サンタ・クローチェ教会」の壁画修復もその延長線にあるようです。

(金沢大学附属図書館報　こだま、171号、二〇一〇)

私の一冊　フイレンツェへのいざない（流沙）

人は様々な動機で旅に出かけます。その一つに本があります。井上靖著の『流沙』の初版は昭和五十五年で、三十年程前に読みました。

結婚式よりもピアノの練習の方が大切な花嫁・章子、結婚式より遺跡の方が大切な花婿・東平の二人が新婚旅行四日目に些細なことでケンカし、別居してしまいます。別居のきっかけは章子のピアノでしたが、二年半後、東平の遺跡発掘がきっかけで二人は和解することになります。

物語では章子の傷心をたどっていく中で、様々な愛の形が語られます。

ロダン美術館のパンセ、サン・ピエトロ寺院のモーゼ、東大寺三月堂等々、東西の名所旧跡とそこの中の芸術作品が紹介されています。とりわけフイレンツェのサンタ・クローチェ教会の礼拝所にあるジョットの二枚の壁画「聖フランチェスコの死」を章子が訪れる場面は、今まさに偉大な人の死に立ち会っている様な厳粛な気持ちにさせられる名場面です。

この「聖フランチェスコの死」壁画に遭遇したことで、何としてもフィレンツェに旅したいと思うようになりました。

「念ずれば通ず」でしょうか。縁あって金沢大学がサンタ・クローチェ教会の主祭壇の八百二十平方メートルにもおよぶ大壁画、「聖十字架物語」を修復することになり、平成十四年にこの仕事で現地を訪れる機会を得て、壁画と対面することができました。

フィレンツェを訪れる方に「ぜひ読んでください」と薦めている一冊です。

また、宮下孝晴・佐藤幸三著『フィレンツェ美術散歩』もフィレンツェ旅行には必携です。

(日本医事新報、4612号、二〇一二)

ミステリーの宝库

ご存知のようにヒトの消化管には実に様々な細菌が常在している。最も少ないのは胃であるが、それでも空腹時には内容物1グラムあたり百個から一千個の細菌が生きている。消化管の入口である口腔や出口である直腸となると、菌数をはるかに多くなり、1グラムあたり菌垢ではなんと十億から一千億、大便では一千億から一兆個にも及ぶとされる。この腸管内菌叢の役割については、感染防御や免疫刺激、消化・吸収の促進、ビタミン合成などが知られているが、本質的なことは現在なお不明である。

皮膚では表皮ブドウ球菌やプロピオニバクテリウムなどの細菌が、1平方センチあたりおよそ十個から十万個存在し、感染防御に役立っている。また、泌尿・生殖器にも部位により菌種は幾分異なるが種々の細菌が存在し、特に腔に存在する乳酸桿菌はデーデルライン桿菌と総称され、感染防御に大きな役割を演じている。

これらの正常細菌叢を形成する菌は基本的に人体には無害である。黄色ブドウ球菌は病

原菌の範疇に入るが、40%前後のヒトが保有していることから、正常細菌叢に加えても良いと思われる。しかし、このような病原性の高い菌がなぜ人体の各部位に高い頻度で存在しているのか。人体に対し病原性を発揮し得るが、実は見えない所で有益なことをしているのかも知れない。あるいは、寄生場所としてたまたま人体を利用しているだけで、自然界において重要な役割を演じているのかも知れない。正常細菌叢を構成する菌はいかにして選ばれたのか、また、これらはいかなる目的で存在し得るのかは神のみぞ知ることである。

正常細菌叢は「ミステリーの宝庫」とも言えよう。（日歯広報、1270号、二〇〇二）

細菌の知恵

コレラ菌と赤痢菌はいずれもかつては人類の仇敵であったが、時代と共にずいぶん様変わりした。

ご存知の如く、コレラ菌はヒトにコレラを起こす。現在までコレラの世界的流行はつごう七回にも及んでいる。第一次（一八一七〜一八二三年）から第六次（一八九九〜一九二三年）までの流行は、すべてインドのベンガル地方に発し、またたく間に世界中に広がった。その原因菌は病原性の強い古典型コレラ菌であった。

一方、一九六一年に始まり今日まで続いている第七次の世界的流行はインドネシアのスワラジ島が発生源で、その原因菌は病原性の弱いエルトル型コレラ菌へと変わった。

また、細菌性赤痢の原因菌は赤痢菌であるが、この菌はA〜Dの亜群に分けられている。志賀潔博士が一八九八年に東京での流行時に発見した赤痢菌はA亜群であり、志賀菌と称されている。赤痢菌はコレラ菌と同様に時代と共にその型が変化している。すなわち、我

が国においては志賀赤痢菌が発見された数年後には、A亜群は下火となりB亜群が主流となった。その後、B亜群の時代が続いたが、我が国がようやく先進国の仲間入りした東京オリンピックの年（一九六四年）を境に、病原性の弱いD亜群が多くなった。

すなわち、コレラ菌、赤痢菌のいずれにも共通していえることは、今日では生存力が強いと思われる弱病原性菌が強病原性菌と入れ替わっていることである。

これら二つの細菌は、自らの生存のために、栄養源となる宿主に死をもたらすのではなく、宿主と共存することを選んだのだ！ ヒトに擦り寄ってきているようで、細菌の「智恵」を感じてならない。細菌に学ぶべきことは少なくはないと思われる。

（日歯広報、1271号、二〇〇二）

細菌との共存

ヒト細胞のミトコンドリアは、実は細菌に由来するものであることをご存知であろうか。

一九二九年のフレミング博士によるペニシリンの発見以来、数多くの抗菌薬が開発され、種々の細菌感染症の治療に用いられてきた。抗菌薬は病原菌を死滅させ感染症治療に絶大な力を発揮する一方で、生理作用を持つ正常細菌叢をも死に至らしめたり、耐性菌による新たな感染症を発生させるといふ、予期せぬ事態を招く。例えば、欧米では院内感染による下痢症の原因菌として最もポピュラーなディフィシル菌感染症は正常細菌叢の死滅がその根本原因である。また、我が国における院内感染症の主要な原因菌として知られているメチシリン耐性黄色ブドウ球菌(MRSA)感染症も、耐性現象がその根本原因である。ディフィシル菌による下痢症や大腸炎は、院内感染症として抗菌薬投与後に発症するのが一般的である。重症例ではMRSA感染症の特効薬でもあるバンコマイシンで治療する

が、再発が多い。ディファイシル菌は健常成人の約10%が腸内に保有しているし、黄色ブドウ球菌は約40%のヒトから検出される。すなわち、両者共に正常細菌叢の構成菌とみなすことができる。抗菌薬治療は正常細菌叢構成菌の大きいなる反乱を引き起こしているように思えてならない。

最近のヒトゲノム解析結果から、ヒトの蛋白質の20%程度が細菌にも存在していると予測されているように、ヒトと細菌とは本質的に似ている。正常細菌叢の存在や病原細菌の弱病原化、抗生物質投与による新しい感染症の発生などは、今まさにヒトと細菌との共存について再考すべきであることを示唆している。自然環境とヒトとの共存を探索するためには正常細菌叢の研究は不可欠であろう。

(日歯広報、1272号、二〇〇二)

二十一世紀の細菌感染症の展望

一九九四年十二月、米国政府は Committee on International Science, Engineering and Technology Policy の下にワーキンググループを設け、emerging and re-emerging infectious diseases に関して討論を開始し、翌年九月に報告書を提出した。この報告書は emerging and re-emerging infectious diseases という概念を最初に提示した公文書である。この中で、新しく発見された微生物による感染症を emerging infectious disease と定義し、既に制圧されたと考えられていたにもかかわらず、再び流行し始めた感染症を re-emerging infectious disease と定義している。それらの和訳が新興感染症、再興感染症である。

一九七三年以降に新たに発見された病原微生物は主なものでも二十三種類（細菌 九種類、ウイルス 十種類、寄生虫 四種類）にも及んでいる。また、十六種類の感染症（細菌感染症 七種類、ウイルス感染症 四種類、寄生虫感染症 五種類）が再興感染症として特

に注目されている。新しい病原細菌の発見・出現については、今まで検出しようとしなかった、検出方法の進歩により発見された、不適切な抗菌薬の投与により出現した、未開地の開拓により新種の危険な細菌と遭遇した、地球の温暖化により熱帯地方の病原菌が拡散した、等を挙げる事ができる。代表的な九種類の新興細菌感染症の原因菌である *Legionella pneumophila*, *Campylobacter jejuni*, TSST-1 (毒素の種類) 産生性黄色ブドウ球菌 (*Staphylococcus aureus*)、大腸菌 (*Escherichia coli*) O157: H7, *Borrelia burgdorferi*, *Helicobacter pylori*, *Ehrlichia chaffeensis*, *Vibrio cholerae* O139, *Bartonella henselae* の中で TSST-1 産生性黄色ブドウ球菌、大腸菌 O157 および *V. cholerae* O139 以外は概ね前述のいずれかによって説明することが可能である。TSST-1 産生性黄色ブドウ球菌は一九八一年に毒素性ショック症候群の原因菌として分離された菌であるが、本疾病は月経時にタンポンを使用している女性に流行した。大腸菌 O157 は一九八二年の米国ミシガン州、オレゴン州でのハンバーガーを原因食とする出血性大腸炎患者で初めて報告された菌であり (CDC のその後の調査で、本菌は一九七五年に既に存在していたことが証明されている)、志賀赤痢菌が産生する志賀毒素と同じ毒素を産生する。これらの感染症はいずれも新しい生活習慣、食習慣と関連しているように思われるが、どのようなことが原因で毒素

産生性を獲得したのか不明である。コレラは *Vibrio cholerae* O1 を原因菌とする疾患であり、その撲滅に種々のワクチンの開発が進み一九九〇年代には野外試験が行われ、その有効性が検証されていた。丁度それを見透かしていた如く、一九九二年新しいコレラ菌 (*V. cholerae* O139) によるコレラがインドのマドラスで発生し、瞬く間にインド全土に広がり *V. cholerae* O1 に取って代わった。菌を解析することにより本菌の由来は分かったが、何がこの様な菌を生んだのかは全く闇の中である。

私の専門はクロストリジウム学であるが、この世界でも同様な現象が見られる。ボツリヌス毒素はいわゆるボツリヌス菌が産生することになっていたが、一九八五年、一九八六年に相次いでボツリヌス菌以外にもボツリヌス毒素を産生する菌が存在することが報告された。しかも、一九九四年～一九九五年、我々の研究により、それらの菌はヒトにボツリヌス食中毒を起こし、かつ土壤中に存在することが見出された。さらに、今までボツリヌス食中毒がないとされていたインドで、一九九八年、このような菌によるボツリヌス食中毒が報告された。地球上最強の毒素であるボツリヌス毒素を産生するが、ボツリヌス菌ではない細菌が新たに生まれたのか、あるいは単に今迄存在していたのが見つかっただけなのかは不明である。

以上、その細菌を生じせしめた原因が不明な病原細菌を幾つか挙げた。二十一世紀の細菌感染症の動向については種々論じられているが、真に新たに生じた細菌による感染症の脅威を指摘しておきたい。二十世紀の物質文明の負の遺産とも言うべき、環境・生態系の破壊・攪乱が新しい病原細菌の創出に関わっている可能性については検証すべき重大な問題である。

(金沢大学十全医学会雑誌、108(3)、一九九九)

大山健康財団と私

昭和四十三年医学部を卒業した。当時、臨床では先輩から「太陽は西から昇る」と言われたら「はい、そうです」と答えねばならない世界であると言われ、自分の性に合わないと思った。そこで、ひとまず学生時代に出入りしていた微生物学教室に入ることにした。公衆衛生に関心があったので、まず細菌学を、次いで精神医学を勉強しようと気軽に考えていた。主任教授である西田尚紀教授（現名誉教授）に話を伺い上ると、のっけから「自分は中国に行くために細菌学をやっている」と言われ、「そうか」と単純に思った（西田教授は学生時代には中国語を勉強し、また中国留学生寮を作る等、中国には並々ならぬ愛着と関心を持っていた）。現在の自分は、ある意味ではその延長線上にある様に思われる。

西田教授は日中間の学術交流を期して一九七八年十月、对中国国交回復の批准が行われている頃中国に入っている。西田教授のこの努力は、日本細菌学会理事会の方針と一致するところであり、当時の武谷健二、佐々木正五理事長の強い支援を受け、一九八四年に「日

本—中国国際微生物学会議 China-Japan International Congress of Microbiology (C-J-I C M) 上海シンポジウム—「一九八四」として実を結ぶこととなった。当時共産圏と学会相互が共同学会を行うことは医学はもとより自然科学系の領域では殆ど無い状態であった。会議は、その後第二回（一九八六年）、第三回（一九八八年）が上海で、第四回（一九九〇年）が岡山で開催され、第五回は本年（一九九三年）八月に上海で開かれた。

一九八四年の第一回は無事終えることができたものの、会議運営の財政は日本側に大きく依存した状態で大きな問題をかかえていた。特にこの国際学会が成功する為には立派な英文の Proceedings を出し中国全土の大学、研究所にも広く配布されることが必要であった。この必須事項は第二回から大山健康財団からの援助を受けることとなり会の発展に大きく貢献している。

大山健康財団の中国への姿勢を示すのに西田名誉教授の話を述べさせていただく。「私は第四回CJICMの御援助をお願いに上がった年（一九九〇年）、応募期限はとづくに終わっていた。私は佐々木博士に伴なわれ大山梅雄理事長をお願いに上がった。理事長は病床にあったが、威儀を正し私を迎え、即座に「わかりました」と答えられた。その後、当時間題となっていた中国との戦争記載の教科書問題（保利文相、この事件で罷免）について

とうとうと語られ、*「民間で頑張らねば」*と私を励まされた。その一カ月後理事長が逝去されたことを知り、あの威儀を正した熱情に終生忘れ得ぬ感動を覚えてゐる」

第一回から第五回までの主テーマ、演題数を記し、感謝の気持ちに代えさせていただく。

第一回 日本、中国における細菌学研究の現状（特別講演16 一般演題48）。第二回 感染領域における免疫学（9、49）。第三回 微生物、特にウイルス・細菌の病原性（8、58）。第四回 細菌・真菌・ウイルス感染症の疫学（特別シンポジウム・特別講演52）。第五回 感染症の検査室診断および治療（19、48）。第四回は日本で金政会長の下で開いたがこの会では中国の主だった学者を三十人招待した。費用の重む中で「Current Status of Infectious Diseases in Japan and China」と題した部厚い立派なProceedingsが大山健康財団の援助で作成された。この様な本が確実につくられ中国に広く行きわたるにつれ学会の参加人員が飛躍的に増え、第五回ではこの対策を考へる必要に迫られる状態となった。この隆盛の一端は、このProceedingsの発行が大いに關係していると思へる。

大山健康財団の助成の対象は、一般細菌感染症、ハンセン病、リケッチア病、寄生虫病となつてゐる。感染症研究の現状につき少し述べる。

前世紀末〜今世紀初頭においては感染症の病原体が次々に発見され細菌学は医学その

ものであった。一九二九年のペニシリンの発見以来、多数の抗生物質の発見により、細菌感染症は解決されたとの認識が広まり、臨床家を含めて細菌学者は減少した。全国の医学部・医科大学の細菌学あるいは微生物学講座の教授をみても細菌学を専門とするものは確実に減ってきている。一方、細菌感染症の世界を見ると、国内ではMRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）が大問題となり、世界では毎年五歳以下の乳幼児数百万人が細菌性下痢で死に至り、四十万人近くが新生児破傷風で亡くなっている。この様な現状に危機感を持ち、一九九一年の夏、全国の若手微生物学教授の有志が京都に集まり、医学部での微生物学教育のあり方などについて討論した。このことが契機となり医学生に微生物学に対する関心を高めることを目的としたセミナーが企画された。私も世話人の一人として参画し、一九九二年夏、第一回乗鞍医学生セミナー（あずみ荘、八月二十日～八月二十三日）が実現した。このセミナーの財源はどこにある筈もなく、全国の教授有志の浄財によって賄われた。セミナーには全国から医学生四十名（九十一名の応募があり抽選により決めた）、教授十九名が参加した。学生達から寄せられた感想文を読むと、セミナーを開いて良かったとの感を深くした。本年（一九九三年）の七月に第二回目を持たれた。

感染症の撲滅には人の養成は重要な柱であり、研究者の裾野を広げねばならない。私達

のこの様な活動により、一人でも微生物学の道を選んでくれるならば、幾許かは大山健康財団の感染症に対する熱意に報いることになるものと信じている。

最後に、大山健康財団の感染症への学術研究助成は、ただ単に研究の助成以上に研究者にとっては精神的支柱であることを付記させていただく。

（大山健康財団二十周年誌、一九九三）

ともしび

(金沢大学白山診療班会誌)

留学生と登る

昨年（平成四年）、山口教授から「白山診療班の部長をお願いできないだろうか」と言われた。大体、私は山口先生からのお申し付けは引き受けることにしているのだが、この件に関しては、自分の足で白山登山が出来ることを条件にお引き受けることとした。

私の研究室には中国からの留学生がいる。常々、滞在中に白山の素晴らしさを感じて欲しいと思っていたが、昨年、今年、夏にはその機会がなかった。彼は来年には帰国するので、秋がラストチャンスということとなり、九月二十五日、二十六日に白山登山を行うこととした。学三西脇太記朗君、学二羽成直行君の両白山診療班員に同行を願った。当日は快晴、願ったり叶ったりの登山日となり、思っていたより幾分元気に室堂に着くことが出来た。室堂主任の木下さんからは、今季最高の日であると知らされ、幸運に感謝した。山口部長は晴れ男で、先生の登山日は必ず晴れると学生から聞かされたが、このことは是非とも引き継ぎたいものです。

私が初めて白山に登ったのは、市ノ瀬からであり、昭和三十七年頃である。昭和四十六年の白山登山、その日は雨、室堂に着いた時には39℃位の熱がで、クロマイを一本尻に注射された。痛かったことは今でも鮮明に覚えている。翌日には熱が下がり、診療班には大変感謝いたしました。この様な私自身の体験が、自分をして、山口教授の跡を継ぐべき気持ちにさせたものと思います。

私は、山口部長の様な名部長となる器ではありません。どうぞ皆様の御指導、御支援を宣しくお願い申し上げます。

(ともしび、36号、一九九三)

転法輪窟

七月十七日朝、白山診療所長の川尻先生から「急性腹症の患者さんをヘリコプターで小松市まで運んだ」との電話を受けた。診療班活動開始最初の日曜日の出来事であり、その後が心配されたが、大過なく平成六年度の診療活動が終わりホッとしている。

白山診療班の部長としての初めての白山夏山登山を、池田先生（泌尿器科、平成四年卒）に同行を願い、七月二十三日（土）、二十四日（日）に行った。本年は、梅雨が短く石川県では例年より八日も早く七月十三日に梅雨明け宣言がなされた。その後も連日30℃を超える猛暑が続いたが、登山予定日頃に台風7号の本土接近が予想され、雨男となることが心配された。当日、快晴とまではゆかないが晴れであった。午前七時、池田先生と医学部玄関前で待ち合わせをして、先生の車で中飯場まで行った。九時三十分、別当出合で合流した四年（学二、本年から一貫した学年で呼称）の坂田君を含めた三人で登り始めた。平素歩く努力をしていたせいか、一度も休むことなく十時二十五分に甚之助避難小屋に到着

した。池田先生が持つて来られたビール（凍った状態のビールが溶けて飲み頃になっていた）を美味しく頂き三十分休憩後、出発した。しかし、ビールの酔いのせいか歩みが進まず、甚之助避難小屋までの勢いはどこへ行ったやら、次々に追い越されてしまい、池田先生、坂田君には先に行つて頂くこととした。エコーラインの登り口で酔いも完全に醒めた。一人で登ることは初めての事だったが、気分の良いものであった。途中、弥陀ヶ原の手前で教室の先輩の石川県保健環境センター木村部長に出会い驚いた。木村部長は学生時代は山岳部で、今朝は釈迦新道から頂上に登り下山途中とのことで、大変な健脚である（室堂では高校時代の同級生に出会った。白山は思いがけない方に出会う場所である）。五葉坂の途中で両大腿部の筋肉が少しつたが、十三時四十分無事に室堂に到着した。

室堂の診療所では、切り傷、風邪、頭痛、虫刺されなどの患者さんが来たが、池田先生が手際良く処置された。白山の夏山登山は昭和五十六年以来であり、夕食時数時間に渡り食堂前に長蛇の列ができたのには驚いた。

翌二十四日（日）朝三時三十分「患者さんです」との木下さんの声に目が覚めた。一瞬緊張したが、昨日の虫刺されの患者さんで一安心。四時から頂上に向かったが、人の列は室堂から頂上まで続き、またまた驚いた。御来光を仰ぎ、御神酒を頂いた後、池田先生の

案内で、転法輪窟に向かった。学生の澤田（五年）、坂田（四年）両君も初めて行くのとこの。頂上から室堂までの道の途中から大白川の方への急峻な崖を少し下った所に転法輪窟があった。その昔、養老元（七七一）年六月十八日泰澄が初めて白山登山し、転法輪窟にて三千七百二十一日の祈念加持をこらしたとする（泰澄伝説）。転法輪窟は白山の源を知るためにも、部長一年目にぜひ拝したかった所であり、感激した。朝食の後、池田先生、澤田君と共に下山した。十時十分に室堂を出て、十一時四十五分に中飯場に到着した。これが部長第一年目の白山登山である。将来の参考までに所要時間を比較的詳しく記した。本年は驚かされるが多かったが、毎年新鮮な気持ちで登りたいものです。白山診療班は、規程第一章第二条にあるように、白山国立公園内における夏期登山者および室堂従業員の治療を主目的とするが、便所掃除等の環境保健活動も重要な活動である。その根底に流れるものは白山を愛する気持ちであろう。白山を知り、愛し、「ともしび」に思いを語り、先輩・後輩・同輩の絆を強くし、伝統ある「白山診療班」の名を一層高めて頂きたいものです。

（ともしび、37号、一九九四）

追記 平成6年の夏は例を見ない猛暑であり、日本列島、特に四国、九州地方は深刻な水不足に見舞われた。石川県でも歴代2位の38度を記録し、真夏日は連続32日間（7月20日～8月20日）続き、連続熱帯夜記録は大幅に更新され、27日間（7月22日～8月17日）にも及んだ。

改革の時代

世の中の変化・改革は徐々に段階的に起こるものではなく、一斉に同時に起こるものであるらしい。ここ数年政治、経済、文化等、あらゆる面で戦後五十年を待っていたかのごとく、変化が求められ、改革が成されている。大学も例外ではなく、平成三年七月の大学設置基準の改正によって大学独自の路線で改革を進めることが可能となり、金沢大学医学部でも相当の改革がなされつつある。歴史が変化・改革を求めているのであろう。白山診療班活動もその荒波の中にいることは間違いない。

一昨年、山口前部長の後を継ぎ、役員名簿、規定に目を通した折り、役員名簿に部長の名称はあるが規定には部長の名称がないことに気づいた。本規定は、昭和四十五年に定められたものであり、当時は実情と規定の間には整合性が保たれていたのであらう。本年リーダーの河原君（六年）に話をし、その他実情と規定が合わない点が幾つか見られたので、検討し、実情に沿った形に規定は改められた（平成七年十月十日。改定点は新規定を御覧になっ

て下さい)。平成七年十月一日に金沢大学医学部に新しい学科、保健学科が設置された。従って、金沢大学医学部と言う時は、医学科と保健学科を指すこととなる。クラブとしての活動は各学科の特有性があり、従来どおり医学科・保健学科の単位で行われるのであろうが、これを機に診療班の構成員を検討することも必要かもしれない。

本年度の白山診療班活動四十八日中二十日間は医師不在であった。これは非常に重要な問題である。副班員としての学生はあくまでも医師の良き協力者としての立場であり、彼らの活動は医師の参加・指導・監督があつて初めて成り立つものである。部員はボランティア活動として白山診療班活動を通じてボランティア活動・精神を体験的に獲得することとなる。本年は事前に十五の病院長にOB登山依頼状を直接手渡し・お送りし、医学部教授会でお願ひし、かつ臨床講座各医局長に依頼状を手渡しし、医師の白山登山をお願いした。しかしながら、それでもなおかつ二十日間の医師不在が生じてしまった。この問題を解決すべく、医師確保に当たる組織を作ることが、正班員の間でここ数年検討されていますが、一日も早く、是非とも実現することを希望致しております。ちなみに、立山診療班では、十全山岳会診療委員会(金沢大学医学部山岳部OB医師)が担当医師日程表作成の任に当たつてしていると聞き及んでいます。

平成七年度、私は白山登山ができませんでしたが、八年度はきつと登りたいと思っております。部長失格とならないように。

(ともしび、38号、一九九五)

父と登る

今年（平成八年）の白山登山（八月三、四日）は感慨深いものであった。私の父は明治四十四年四月生まれであるから今年には八十五歳である。登山二日前に突然「白山と一緒に行きたいが……。足腰は弱ってきたけど今年はまだ大丈夫だと思おう……」とのことで急遽親子登山ということになった。生化学第二講座山本博教授、六年の龍君、五年の森さんと医学部玄関前で待ち合わせ、七時三十分に出発。永井旅館にて杖を買い求め、十時に中飯場に到着した。入念に準備を整え、十時十五分、父を先頭にゆっくりゆっくり登り始めた。十時十五分毎に休みながら十一時三十分甚之助避難小屋に着いた。途中下山中の山口正人先生（平成四年卒）、五年の田沢さんに視で出会う。昼食を取り十二時五分に出発、砂防新道と南龍ヶ馬場方向との交差点の手前の坂では特に休み休み登り十三時四十分頃「黒ボコ岩」に到着、十分休憩の後十四時五葉坂下に、しばし休み最後の難関を十分かけ登り切り、十四時二十分無事室堂に到着した。坂の中程で診療所長の川尻先生に出会い引き継ぎ

を受けた。

室堂主任の木下さん、白山比咩神社奥宮祈禱殿へご挨拶に出向いた後、診療所で診療にあたった。痙攣、虫さされ、腰痛、めまい、頭痛等々の患者さんに処置を行い、久しぶりに医者であることを思い出した。自分の手に余る患者さんは谷川先生（昭和四十一年卒）にお願ひした。感謝感謝。診察が一段落し、夕食が終わっても登山連絡のあった影近先生（昭和六十一年卒）が到着せず少し心配な気持ちでいたところに、二十時二十分お子様と到着し一同安心した。足首捻挫のため無理をせず時間をかけて登って来たとのこと。

今年の白山は御来光がほとんど見られない（残雪が多いため？）とのことであったが、太鼓の音で四時に起床、頂上に向かった。案の定、見渡す限りのガスで、御来光を拝する事はできなかった。記念写真をとり、お池めぐりコースで室堂に戻った。本当に雪が多く一部回り道をした程であった。七時三十分朝食後、午前中一杯診療所に詰めていたが患者さんもなく、のんびり休むことができた。

昼食後、五年の御簾君と一緒にエコーライン経由で下山した。森さんには南竜ヶ馬場まで送ってもらった。十二時四十五分に室堂を出発し、十五時二十分に中飯場に着いた。帰路、白峰村林西寺に立ち寄り夕方金沢に着いた。

父との白山登山は昭和三十九年、四十一年、五十一年に次ぎ二十年ぶりで四回目であった。今回は御来光を拝する事ができず、宿題が残ったような気がする。御同道頂いた、またいろいろとご配慮を賜わった山本博教授を始めとする皆様方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

今年の白山夏山診療は医師不在日が十七日と少なかったが、来年度は是非とも不在日ゼロ日としたいものです。一層の努力をお願いします。 (ともしび、39号、一九九六)

追記 明治44(1911)年生まれの父は、平成21(2009)年3月16日に亡くなった(97歳11カ月)。

朋有り遠方より来たる

同級生の竹越靖夫先生は米国で活躍している優れた外科医である。毎年お盆の頃一時帰国するのだが、今年白山登山（八月十三日、十四日）を予定していた二日前に連絡があったことから一緒に登ることにした。また、助っ人として甥を連れていくこととした。

竹越先生は前日から拙宅に泊まり、当日は朝六時起床。同行をお願いした池田大助先生（泌尿器科、平成四年卒）が自宅まで迎えに来られ、七時五分出発。出発時には雲が厚く雨が降ったらどうしようかと心配したが、次第に雲が薄くなり中飯場に着いたとき（九時二十五分）には時々日が射すようになった。待つことしばし、迎えの山端君（五年）が室から到着、記念写真を撮り九時五十五分に竹越先生を先頭に登り始めた。宿泊予約制のためか行き交う下山者も少なく順調なペースで登り、別当観（今夏、写真撮影中の転落死が発生）に十時二十五分、甚之助避難小屋には十一時十分に着した。いつもはここで昼食となるのだが少し早いので十分間だけ休み、もう少し登ることにした。十一時四十七分、

砂防新道と南竜ヶ馬場への分岐点に到着、景色を眺めながら昼食をとった。十二時十五分に出発、この頃から雨がパラつくも特に雨具を必要とすることもなく十三時に「黒ボコ岩」に到着した。雨が少し激しくなりカッパを着用、十三時三十五分に室堂に着いた。

室堂主任の木下さん、白山比咩神社奥宮祈禱殿へ御挨拶に出向いた後、診療所で診察にあたった。診療所では青島敬二先生(平成四年卒)、紺崎友晴先生(平成九年卒)、森さん(六年)、坂井君(五年)、山端君(五年)が診療にあたっていたが、さらに竹越、池田の両先生が加わり豪華なメンバーとなり、皆さんに診療はお任せすることとした。このような時に患者さんは少ないもので、のんびりと過ごすことが出来た。夕食後、一同、竹越先生に最近の米国医学・医療事情について話を聞いていたが、そのうち先生は手術の糸結びの実習を始めた。私には手品のように見えとても真似ができなかったが、池田先生は今まで知らなかった結び方ということで習得するまで繰り返し何度も練習をしていた。「若い外科医としては当たり前のことである」と言っていたが、感心した。

翌朝、遠来の客を歓迎してか奇跡的に晴れ。四時起床、頂上に向かった。五時九分、見事な御來光を拝することが出来た。背後の雲海に白山山頂の影が写り、影の山頂部分にはうっすらと丸く虹が架かっていた。初めての経験で感動した。お池めぐりコースで室堂に

戻った頃（七時五分）には空一面雲に覆われ、山頂も雲で見えず、まさしく御来光のときだけ晴れていたようで、「遠方より来たる朋」に対する天の采配に感謝した（ちなみに八月に入ってから御来光を拝することが出来た日はわずか三日のみとのこと）。

十時に室堂を出発。竹越先生が足を痛め、最後には肩を貸し負傷兵さながらの格好になったが十四時二十分に無事中飯場に到着した。下山に余計時間がかかった白山登山であつた。

今年の白山夏山診療は医師不在日は昨年より三日少ない十四日であつたが、来年度こそは是非とも不在日ゼロ日としたいものです。一層の御協力をお願いします。

（ともしび、40号、一九九七）

やはり晴れ男か

昨年十月頃から両膝に時々痛みがあり少々心配であったが、今年も白山登山をすることとし、登山日を八月下旬に決めた。

八月二十二日、快晴、朝七時前に五年の高島君が迎えに来て、七時十五分に出発、八時四十五分に市ノ瀬、九時二十五分に中飯場に着いた。支度を整え、二十分歩き・五分間休憩の方式で登ることとし、九時三十七分に登り始めた。五分間の休憩を二回はさみ、十時五十分に甚之助避難小屋に到着した。本年もここでは昼食は取らず、五分間休むだけにし、さらに登り、十一時十七分に砂防新道と南竜ヶ馬場への分岐点に着いた。心地よい陽射しを浴びながら、二人で御握りを分けあい昼食を取った。十一時四十分に出発、途中五分の休みを取り、十二時二十五分に黒ポコ岩に到着、ここで十分間の休みをとり、十三時に室堂に着いた。所要時間は三時間二十三分で、昨年より十七分少なかった。

室堂主任の木下さん、白山奥宮祈禱殿へご挨拶に出向いた後、診療所で診察にあたった。

診療所では山端君（六年）、金井君（三年）、三輪君（二年）、藤田君（二年）が診療にあたった。患者さんは、筋肉痛等数名であり、どうも私の登る日は患者さんは少ないようである。久し振りに晴れたとのことで皆で夕日を観に行った（六時三十九分日没）。

翌朝、快晴、四時十分起床、四時三十五分に登り始め、五時五分に御前峰山頂に着き、本年も素晴らしいご来光を拝することができた。今回、宮司さんは奥宮祈禱殿から頂上の奥宮までは下駄で登られることを初めて知りましたが、各々の道があるものと敬服した次第です。

本年限りで室堂センターは取り壊されるとのことで皆で診療所の看板とともに記念写真を撮り、九時三分に室堂を金井君と一緒に下山した。金井君はサンダルで登り（サンダルで登った理由は省略）、下りる時はどうするのかと思っていたが、室堂から長靴をもらって下山した。同君は柔道が強く、中々の豪傑で、武士の風貌があり、将来が楽しみである。途中、長靴が破れ、どうなるかと少し心配したが、十一時三十七分に無事別当出合に到着した。別当出合からはバスで金沢へ帰った。本当に久し振りに別当出合まで歩き、バスで帰った白山登山であった。本年は晴れが少なく、八月中二日連続して晴れたのは八月二十二日、二十三日の両日だけであり、山口前部長を継ぎ、私も「やはり晴れ男か」と納

得した。

今年の白山夏山診療は医師不在日は二十六日であり、昨年より十二日増えた。来年度、診療所は白山荘の一角で行うことになろうかと思いますが、班員の先生方の一層のご協力をお願い致します。

(ともしび、41号、一九九八)

教訓

本年（平成十一年）の白山登山は八月二十七、二十八日を予定していたが、天気予報では雨ということとで急遽二十六日（木）、二十七日（金）に変更した。

小堀君（五年）の車で、朝七時に家を出発した。途中鶴来のローソン（白山までの最後のローソン）である。白山登山の人はここでよく買い物をするらしい）に立ち寄り、九時二十分に中飯場に到着した。前日の連絡で藤田泉さん（五年）が九時過ぎには下りて待っているとのことであったが、探しても見当たらず、呼んでも答えなく、診療所で何かあったか、あるいは間違えて別当出合まで下りてしまったか、気にしながら九時四十分の中飯場を出発した。例年のごとく、二十分歩き五分休憩のペースで登り、十時五十五分に甚之助避難小屋に到着した。下山する白山比咩神社の建部さんと出会い、診療所や藤田さんについて尋ねる。診療所には異常なく、藤田さんは朝食の後に迎えに下りたとのことで一安心し、待つ場所を間違えたとの結論を得た。藤田さんに出会ったら、先に登っているとの伝言をお願い

いする。十一時二十五分、砂防新道と南竜ヶ馬場への分岐点に到着。昨年と同様に昼食を取ることにする。「藤田さん、弁当も持たず、お腹が減って大丈夫かな」「せっかく藤田さんの弁当を持ってきたのに残念。木の枝にでもぶら下げておこうか」等と、小堀君と二人で余計な心配をし、サア食べようとした瞬間、藤田さんが登ってくるではないか！ 丁度食事間に合うなんてスゴイ等と言いつつ美味しく昼食を取った。結局、藤田さんの待っていた場所は車道から少し下った登山道にある休憩所の「中飯場」（彼女はそこに九時に到着し、十時三十分まで待っていた！）であつたこと、何か呼ぶ声があったことも判明。

教訓その一、「情報は正確にしましょう」。

十二時三分に出発、十二時四十六分に黒ボコ岩に到着。雨がパラつき始めるも、雨具を必要とするまでも至らず十三時十三分に診療所に到着した（所要時間三時間三十三分。ここ数年の平均時間）。

本年度から三カ年計画で室堂センター新築とのことで、診療所は白山荘の入り口右側に、狭いながらもキッチンとした形で新設されていた。工事中にもかかわらず、クラブ活動としての白山診療班の活動が続けられることについて、白山観光協会の皆様方に改めて感謝を申し上げる次第です。室堂主任の木下道雄さんにご挨拶し、七十歳の定年により本年

が最後と知る。しばし休憩の後、小堀、藤田、八重樫（三年）君と一緒に白山奥宮祈禱殿にご挨拶に行く。北村権宮司さんから日本の神々など色々なお話を伺い、結局一升の御神酒を空けてしまった。六時三十分の夕食後、道雄さんから白山環境と自然保護、環境庁の保護政策などについて種々お話を伺った。自然の自然崩壊をヒトは止められるのか、止めていいのか、どこまでが自然崩壊で自然破壊なのか等々。そうして診療班プラス一名、飲んで喋って十時過ぎに就寝した。

翌朝は天気予報のとおり雨、六時の日供祭に参拝。診療所滞在中、患者はゼロ。宿泊者が少ないせい（数十名）であろうが、私には幸いであった。雨の中、藤田さんのバイク用の雨具を借用。小堀君に同行してもらい、北村権宮司さんと共に九時十五分室堂を出発、休憩をとらずに、十一時三分に中飯場についた。北村さんに鶴来まで送って頂き車から降りたその時、私は大腿四頭筋の麻痺により足の踏ん張りが全くきかず不覚にも尻餅をついてしまった。

教訓その二、「無理をせずに、下りでも休憩をとること」。

そして、鶴来からは久しぶりに電車に乗って帰った。毎度のことであるが、特に本年は皆さんにお世話になりました。ありがとうございました。

本年の医師不在日は二十六日であった。なんとかゼロ日にしたいものです。先生方の一層のご協力をお願い致します。

付 診療所からの連絡で二十七日のNHKテレビの「山ちゃんの六〇〇 中継・白山室堂から」(夕方六時)に出るとのことであったが、班員はすっかりとは見えなかった。ひよつとすると、沢山の人達が映っていた最初の一瞬に出ていたのかもしれない。翌朝七時三十分の「中継・白山の夏」には木下さんの一言がありました。今年の夏は七月二十日から二十三日間真夏日が続き本当に暑かった(金沢の最高気温は七月三十日の36・9℃で、七月としては金沢地方気象台の観測史上最高記録)。(ともしび、42号、一九九九)

コバイケイソウが美しかった

七月末、白山行きは八月十三日(日)、十四日(月)にすることにした。台風9号の接近が報じられたが、十三日朝、山方面には雲があるも晴れ。高田君の運転で、田口君(四年)と共に予定通り六時三十分にかを出発した。杖を忘れた事に気付き家まで引き返したり、コンビニでお茶・飴等を買って求めたり、更には朝食を取る等して九時に中飯場に着いた。支度を整え三十分歩きしばし休憩のペースで登ることにし九時七分に出発した。「別当観」、「中飯場跡(甚之助避難小屋手前の広場)」、「エコーラインへの分岐点から砂防新道へ八分ばかり登った地点」、「延命水」、「黒ボコ岩」でゆっくり休み、水、景色を楽しんだ。午後一時に診療所に到着した。所要時間は三時間五十七分で、その中の休憩時間は一時間十一分であった。

徳毛君(六年)、金井君(五年)、八重樫君(四年)の出迎えを受け、診療活動について報告を受ける。着替えの後、中入室道主任さん、白山比咩神社奥宮に学生たちと共にご挨拶

拶に出向く。神社さんには安達権禰宜さん方がおいでになりビールを頂く。そのときに転法輪窟の祠が壊れ、地藏さんだけになっているとの話を伺った。それを確かめるべく徳毛、金井、八重樫君が転法輪窟まで出掛けることにした。すると結果はその通りであったが、一体いつ祠が壊れたのだろうか。さて、診療活動については、患者さんは膝の痛み、類高山病の二名と少なかった。これは登山者が少ないこと、食事が出されないためしつかりと準備を整えた登山者が多いことが原因であるように思われる。

五時三十分夕食を頂き、軽いお疲れさんコンパを行い、診療班の現実的大問題「緊急連絡のための携帯電話のアンテナ」について等種々話をし十時頃就寝した。

朝四時十分、太鼓の音で目を覚まし、御来光を期待し全員で頂上に登った。一面の雲海の中で日の出の方向には雲の低い個所があり、少しばかりの期待があったが残念ながら御来光を拝する事はできなかった。「来年もあるさ」ということだろう。頂上で記念写真を撮り、その後徳毛君は加賀禪定道で下山した（朝六時）。初めての道ということで全員で無事を祈った。辺り一面雲、今にも雨が降りそうだったので我々はお池巡りをせずに、室堂に戻った。案の定雨が降り始めたが、九時過ぎには雨も上がり金井君に同行を願いエコーライン経由で下山した。本年は残雪が多かったため開花が遅く、例年ならとつくに散っ

ている筈の花が沢山咲いていた。中でも一面に白く咲き誇ったコバイケイソウは見事だった。コバイケイソウは数年に一度だけ咲くということだが今年には花が咲く年と言う事であろう。九時四十分診療所を出発し、「エコーラインと砂防新道の分岐点」、「視」で休憩し、十一時四十五分に中飯場に着いた。そして十二時、出発しようとしたまさにその時、伊藤さん（平成十年卒）、広畑さん（平成十一年卒）が到着したので、後をお願いした。十二時三十分市ノ瀬に着き、頂上へ電話すると徳毛君は無事下山したとの報告を受けた。18キロメートルを六時間で下山したことになる。すばらしい健脚である。私には無理な道だと思いがこれから頑張ってみよう。

今年も暑かった。七月三十一日、金沢では観測史上七月としては最高の37・3℃、輪島では観測史上最高の38・2℃を記録した。また、金沢での八月の真夏日は三十日間であった。

（ともしび、43号、二〇〇〇）

花咲き誇る観光新道を下る

平成十三年の白山登山は、小林和久経理部長を団長とする経理部職員四名（部長、四柳山本、平山氏）、薬理学吉本教授の計六名の過去最大のメンバーで行った。平山氏は白山登山の大ベテランで、食事を含めて綿密なスケジュールを立てて頂いた。

二十一日朝、天気は晴れ、医学部玄関に集合、六時三十分には小林部長の車で出発、八時二十分に中飯場に到着した。エコーラインで登ることとし、迎えに降りてきた五年生の馳君とともに、八時四十分に出発した。途中、別当視（九時七分）、甚之助避難小屋（九時五十五分）で十分ばかり休憩し、十時四十分にはエコーライン登り口に着いた。お花畑コースであるが時期のせいか随分花が少ないように思われた。エコーライン中腹で昼食を取り（十一時）、各自持ってきたお握り、おかずを交換し、小学生の遠足さながら昼食を楽しんだ。十一時三十分出発、時々大腿が痙攣を起こしそうになるも、無事十三時に室堂に到着した。診療所では六年生の河合君が留守番をしており、今年は患者さんが少なく、筋肉痛

の方が数人との報告を受けた。着替えをし、中出室堂主任さん、白山比咩神社奥宮に御挨拶に出向いた。安達権禰宜さん、建部権禰宜さんがおいでになり、今年の白山の様子等を伺い、まさしくこれぞ幻というべく銘酒「菊理媛」を御馳走になった。四時三十分、自炊場の建物の中でストーブ、コッヘル等で夕食を作り始めた。作るかたわら、白山の事、本日の登山の様子、疲れ具合等をつまみにビールを飲み交わし、レトルトカレーを美味しく頂いた。子供に帰った楽しい一時であった。夕方、秋元先生（平成六年卒）が到着され万全の診療体制が揃うも、患者さんもなく、穏やかな夕方を過ごし、二十時には眠りについた。

二十一日、朝三時五十分、神社の太鼓の音で目覚め、御来光を期待し頂上へ向かった。頂上着四時三十五分。辺りにはガスが立ち込め、日の出時刻の四時五十一分を過ぎても日は出ず、御来光を拝することはできなかった。日供祭に参拝後、お池巡りに行く頂上付近の道を歩いている時、五時十分頃に出た太陽を浴び、二度に渡ってブロッケン現象に出合った。いずれも数秒であったが、貴重な嬉しい体験であった。お池巡りは自然解説員とともに歩いた。「千蛇ヶ池の万年雪が数年前に全部溶けてしまった。でも底の方は凍っていたので蛇は逃げ出さなかった。まあ、本当に蛇がいるかどうか。いないと思います」等とても丁寧な解説で良かった。七時十分に室堂に着いた。朝食に「五目ご飯」を食べ、全員

で記念写真を撮り、八時四十分に河合君も一緒に室堂を出発した。平山氏は車の回収のため黒ボコ岩から砂防新道を、残り六名は観光新道經由で下山した。ニッコウキスゲ、ハクサンフウロ等、花真つ盛りで素晴らしい眺めであった。ずーっと快適であったが最後の下りが、やはりきつく、ガクガク、フラフラになりながら十二時十分無事に登山口に着いた。帰り道、白峰村の天望の湯につかり、近くでソバを食べ、十五時三十分、医学部に着いた。今年の梅雨明けは例年より一週間早く七月十五日であった。その後数日雨模様であったが真夏日が続き暑い夏(二十一日は32・7℃)であった。本年の医師不在日は二十三日。先生方の一層のご協力をお願い致します。

(ともしび、44号、二〇〇一)

診療所新装なる

今年は白山国立公園指定四十周年にあたり、数年前から全面改装中の室堂センターがリニューアルオープンした。谷本知事が八月二日、三日に登られ、三日午前には白山室堂リニューアルオープン記念式典が行われ、白山の自然保護や室堂の管理等に功績のあった団体として白山診療班も表彰された。

このような記念すべき平成十四年、八月十七日（土）、十八日（日）に白山登山を行った。教室の尾崎先生の運転で、高田先生（平成十四年卒業）にも同行を願い、七時に家を出発した。安全運転で九時に中飯場に着いた。支度を整え、例年の如く三十分歩き、しばし休憩のペースで登ることとし九時十分に出発した。途中二回休憩し、十一時七分に「エコーラインと砂防新道の分岐点」に到着し、昼食をとった。十一時四十分に出発、三回休憩し、午後一時四十分診療所に到着した。所要時間は四時間三十分で、その中の休憩時間は一時間二十八分であった。

新センターは五葉坂の方にも玄関があり、診療所はそこから奥の右側（以前と同じ場所？）に新設されていた。診療室はベッド二台分の広さ（約4坪）で、さらに奥に四畳半の畳敷きの宿直室が設けられ、診療班への期待の大きさが感じられた。診療班は六年の野村君一人で守っており、診療活動の報告を受ける。着替えをし、小沢室主任さん、白山比咩神社奥宮に御挨拶に出向いた。しばし歓談の後、診療室に戻り年に一回の医師として待機した。当日の登山者は六百名ばかりと、かなり多いので患者さんも多いのかなと案じたが、捻挫等数名の患者さんが来られただけであった。高田先生が大活躍で診療活動は無事終了した。八時過ぎに夕食を頂き、しばしビール等で種々語らい九時過ぎには就寝した。

翌朝四時起床、四時二十分に頂上を目指し出発、五時に頂上に着き、日の出を待つ。五時十二分の日の出時刻を過ぎても日は見えず、残念ながら本年も御来光を拝することはできなかつた。日供祭に参拝、御神酒を頂いた後、県立中央病院の大家院長先生方と頂上で記念写真を撮る。高田先生はそのまま下ったが、県立中央病院の宮田先生とお池めぐりをした。千蛇ヶ池から右へ曲がる室堂への近道を初めて通り、七時に室堂に着いた。

八時三十分に朝食をとり、診察室で過ごした。十時二十分、高島先生（平成十二年卒）が到着。なんと別当出合から二時間二十分で登ったとのこと。まさに羨望…。

昼食後、一時十五分に室堂を出発し、三時三十五分に無事に中飯場に到着した。帰り道、歩数を数えたら、1・2キロメートルが千八百歩であった。来年は、疲れを感じないよう歩数を数えてみようかと思う。今年から医師不在日は休診とすることにした。今年の医師不在日は三十二日であった。ゼロ日となるよう、班員の先生方の一層のご協力をお願い致します。

(ともしび、45号、二〇〇二)

日記 昭和三十七年五月四日（金）

今日、昭和三十七年五月四日より又日記をつけようと思う。日記には数々の思い出があり、遠い未来には我心をなぐさめる一種の心の郷である。

人間、進歩には常に前方を注視しなければならぬ。しかし前方だけでは不十分である。常に過去を考察し、未来を予測し、洞察しなければならぬ。未来を考察することは確かに重要である。自分の人間としての未来、地球の地球としての未来、世の社会としての未来。輝けるものか、暗黒のものか、太陽の日の出の如くか、日没の如くか、他人を見抜く目、未来を見抜く目それが自分の大きな課題である。

略 歴

昭和十九（一九四四）年一月五日生

入学前 … 両親が稲刈りをしている時、田圃の片隅にて日傘の下で、首に紐でぶら下げた塩昆布をしゃぶっていました。

小学一年…同級生（二クラスのみ、二十五人）の一人が「旅行の友」（ふりかけ）を持ってきました。うらやましい思いがしました。

小学二年…「こんな簡単な問題があるのか？」と思いつつも、絶対の自信を持って解答したら全部間違いで零点。反対語の問題でした。「みぎ」の反対語を「ぎみ」と書きました。

小学二年…通信簿の成績が良かったことについて、父親から「先生が依怙贖した」と叱られ通信簿を破られました。母がセロファン紙で繋ぎました。

小学三年…父の厳しい指導のもと、座り机で、正座をさせられ「鶴亀算」をさせられました。

小学四年…円の半径から円周を求める問題（ドリル問題集）。誰も解けずに夕方まで全員居残りになりました。円周率は教わっていなかったと思います。

小學校五六年…朝礼の後、運動場で草取りをした後は、一日中先生と一緒にソフトボールをしていました。自分はピッチャーでした。

中学二年…担任の先生が休まれたことについて、終業の会で「なぜ休んだのですか？」と代理の先生に尋ねたら、胸ぐらを掴まれ、はずみで全部のボタンが取れました。職員室で他の先生（女性）に直して頂きました。

高校二年…数学の時間、対数記号（ \log ）の先生の発音が何回聞いても「ロング」としか聞こえなかったもので、手を挙げて「ロググではないですか？」と質問したらひどく叱られました。

高校三年…大学受験の模擬試験、クラス全体の成績が悪くて担任の先生からきつく注意され、翌日、「昨日の話の中で何を覚えているか？ はい、中村君」と問われ、唯一覚えていたこと、「先生は年なので君らよりは早く亡くなると、話されました」と答えたら、またきつく叱られました。

付 録

クロストリジウム属の

研究に捧げた半生

最初に手掛けたDNA分類

—先生はクロストリジウム属の研究がご専門ですが、細菌学の道を選ばれた動機からお聞かせください。

中村 私は医学生時代から神経学に関心を持っていたのですが、臨床をやりながら研究をするという器用なことはできませんので、まず研究からスタートし、いずれ臨床に戻るつもりで西田尚紀教授（現・金沢大

学名誉教授）の細菌学教室に入りました。

当時は抗生物質の開発によって多くの感染症が克服されつつあり、「感染症の時代は終わった」といわれていた時代で、細菌学はどちらかといえば最先端の学問ではなく、西田教授からも「もう細菌学は何もすることがないよ」ともいわれました。しかし、破傷風毒素など神経毒に興味があったのと西田教授の講義の面白さに魅かれ、細菌学の道を選んだのです。

そして、西田教授は当時、細菌の分類学をやっておられたので、私もクロストリジウム属の分類から始めることにしました。

クロストリジウム属というのは、グラム陽性、嫌気性の桿菌で芽胞を作る一群の菌

属のことをいいますが、毒素を産生する有毒株と、毒素を出さない無毒株とがあり、有毒株にだけ特別な名前がついています。例えば破傷風毒素を出すものを破傷風菌 (*Clostridium tetani*)、ボツリヌス毒素を出すものをボツリヌス菌 (*C.botulinum*) と呼んでいます。

しかし、中にはボツリヌス菌に似ているながら毒素を出さないスポロゲネス菌 (*C.sporigenes*) のようなものもいて、これがボツリヌス菌と同じ種なのか、違う種なのかはよくわかっていませんでした。そこで、まず、これを整理してみようと思ったわけです。

細菌を分類するにはいろいろな方法があ

りますが、西田教授が私に手掛けるよう指示したのはDNAの塩基配列順序の相同性によって種を分類するDNA交雑法 (DNAハイブリダイゼーション) という手法でした。

現在でこそ、この手法は最も信頼性の高い分類法として広く使われていますが、当時は最先端の技術で、私は大阪市衛生研究所を訪れ、加藤敬香先生よしひろに初歩の技術を教えてもらいました。一九七〇 (昭和四十五) 年のことで、研究所の地下室のだるまストーブの傍で破傷風菌からとったDNAを調べたことを思い出します。

そこで、その翌年の一九七一年にアメリカのバージニア州の嫌気性菌研究所に留学

し、嫌気性菌研究の大家であるスミス、ジョンソンの両博士に師事し、一方のDNAをセルロースメンブランに固定し、もう一方をアイソトープなどでラベリングして交雑反応を行い、相同性を調べるといふ最新の技術を教えてもらいました。

この分類法によって、先のスポロゲネス菌はボツリヌス菌の無毒株であることなどがわかったのですが、最初の十年間はDNA分類一筋にやってきました。

— クロストリジウム属といえば腸内の有害菌であり、食中毒菌にも指定されているウエルシユ菌がよく知られています。

中村 現在、クロストリジウム属には百種類以上あることがわかっており、このうち

人間に病気を起こすものは十数種類あります。

ウエルシユ菌は学名をクロストリジウム・パーフリンジエンス (*C. parvifingens*) といいますが、私の最初の論文がこのパーフリンジエンスの同定基準についてで、この中でクロストリジウム・アブソウム (*C. absoum*) とクロストリジウム・パラパーフリンジエンス (*C. paraperfingens*) という新種についても記載しました。この菌は後にクロストリジウム・バラティ (*C. baratti*) と名称が変更になりましたが、この中にボツリヌス毒素を産生するものがあります。

ボツリヌス菌を訪ねて

中国奥地まで

—先生のエッセイ「ボツリヌス菌を訪ねて」
を読ませて頂いたことがあります。中国の奥地
にまで行かれたとか。

中村 ボツリヌス菌は代表的な毒素型食中
毒菌で、これまでも「イブシ食中毒」、「辛
子レンコン食中毒」などで多数の死者を出
しています。ボツリヌス菌が産生する神経
毒素はA型からG型までの七型に分けられ
ており、産生する毒素の型によって、A型
ボツリヌス菌、B型ボツリヌス菌などと呼
んでいます。このうち、ヒトに食中毒を起
こすのはA、B、E、F型ボツリヌス菌で、

その他の型のボツリヌス菌は野鳥や家畜な
どに中毒を起こします。「イブシ食中毒」
はE型、「辛子レンコン食中毒」はA型ボ
ツリヌス菌によるものです。

ボツリヌス菌は世界中の河川や湖沼、海
岸などの土壤に住みついている嫌気性菌で
すが、日本の土壤からはC型とE型菌しか
検出されず、日本でのA、B型菌による食
中毒は輸入食品が汚染されていたことに
よって発生したとされています。

一九七三（昭和四十八）年のことでした。
私の住んでいる石川県の河北潟で多数のカ
モが変死する出来事があり、原因究明のた
め県内の四つの潟の土壤中のボツリヌス菌
を調べてみました。この結果、いずれの土

壤中からも高頻度にC型菌が検出され、しかも渡り鳥の多い秋になると検出率が高くなることがわかりました。しかし、この時の調査ではA、B型菌は検出されませんでした。

そこで日本にはA、B型菌が住みついていないのか、それとも検出方法が悪いのかを確かめるため、A、B型菌が多く住みついている中国新疆地区と日本の土壌を同じ方法で調べてみようと考え、一九八一年十月末に約二週間かけて中国新疆自治区、甘肅省へ山川講師（現・富山県衛生研究所）と二人で出かけました。新疆では西遊記で有名な火焰山や、甘肅省では敦煌、万里の長城の西端など数十地点で土壌を採取して調

べたところ、いずれの地点でも高頻度にA、B型菌が検出されました。そして、帰国後、同じ方法で石川県内の土壌を調べてみたのですが、やはり検出されるのはC、E型菌だけでA、B型菌は検出されませんでした。

一九八四（同五十九）年には熊本県で辛子レンコンによるA型ボツリヌス食中毒が発生したため、石川県内のレンコン田も調べてみましたが、ここでもC、E型菌しか検出できません。そこで、中国大陸に近い南西諸島や対馬、さらに黄砂が降ってくる山陰地方や北九州地方の日本海沿岸を調べてみましたが、やはりA、B型菌は検出されませんでした。

また、ボツリヌス菌の分布は大陸の成

立にも関係しているとされています。

プレート・テクトニクス理論によると約六千五百万年前の新生代にインド亜大陸を乗せたプレートがユーラシア大陸に衝突し、ヒマラヤ山脈やチベット高原が、できたとされています。

この時、海底の土壌や生物と一緒に海岸の土壌中に多く住みついているE型菌も押し上げられたため、現在でもチベット高原にはE型菌が多いとされています。そこで、これを確かめるため、中国側の協力を得てチベット高原で土壌を採取したのですが、チベット税関は土壌の持ち出しを許可してくれず没収されてしまい確認できませんでした。今だに残念でなりません。

このほか、伊豆半島などの土壌も調べ、石川県の手取川の河口で、日本では初めてB型毒素を検出しましたが、ボツリヌス菌の分布の地域特性が何に由来するのかはまだはつきりとわかっていません。

―ボツリヌス菌というおなじみの食中毒菌一つとっても、まだわからないことがたくさんあるのですね。

現在も続けている

デیفイシル菌の研究

―先生はクロストリジウム属の中でも特にデیفイシル菌研究の第一人者です。

デیفイシル菌とはどのような菌なのでしょうか。

中村 クロストリジウム・デイフィシル (*C. difficile*)は一九三五年にアメリカのホールとオトールらによって新生児の便から発見されました。ところが、この菌は、培養液がモルモットやウサギに致死作用を持っていることは知られていたのですが、酸素を嫌う嫌気性菌で培養がむずかしかったため研究が進まず、健康な小児やアザラシの腸内にもいることまではわかったものの、ヒトの病気との関係は長い間不明でした。

私の師匠であるスミス博士が一九六二年にガス壊疽や膿瘍、腹水、胸水などの病巣からも分離していますが、この時も腸管疾患との関係はまったく不明でした。

ところが一九七九年になってデイフィ

シル菌が偽膜性大腸炎を起こすことがわかり、抗生物質の投与によって悪化する下痢症の原因菌であることがわかってきました。

偽膜性大腸炎というのは腸管粘膜表面に、壊死した粘膜表面や血漿成分などが膜のようなもの(偽膜)を作る腸管疾患です。下痢と同時に熱が出るなど細菌性の炎症が起きているので抗生物質を投与するので効果がなく、次々に別な抗生物質を投与することによってさらに症状が悪化するなど、デイフィシル菌の存在が知られていなかった当時は死に至ることも少なくありませんでした。

私が最初に経験したのは一九八〇年の

高齢者の下痢症で、この時はメトロロニダゾールがよく効き主治医に喜ばれました。

—デオフィシル菌はどこにいるのですか。

中村 他のクロストリジウム属同様、自然界の泥の中や水の中などいたるところにいて健康なヒトの腸内にも住みついていきます。私が一九八〇年に本学の医学部の健康な学生百四十九人を調べたところ二十三人（15%）が持っていることがわかりびっくりしたことを憶えています。

またデオフィシルには有毒株と無毒株とがあり、このうち十六株が有毒株でした。

—有毒株を持っている人たちが何らかの病気で抗生物質を使うと下痢を起こすのですか。

中村 それについては両論があつて、最近

ではデオフィシル菌を保有しているヒトはかえつて下痢を起こしにくいという論文もあり混乱しています。

抗生物質によつて腸内フローラが乱されると、もともとデオフィシル菌を持っているヒトはそれが腸内で増え、持っていないヒトでも外来性のデオフィシル菌が定着しやすくなるのかもしれない。

そこで、現在、問題になっているのがデオフィシル菌の腸管疾患の増加で、一九九〇年代にはウエールズ、イン格蘭ドで症例が約八倍に増えたと報告されますし、アメリカでも確実に増加傾向にあるとされています。

デオフィシル菌の感染症例が本当に増

えているのか、診断技術や菌の検出技術が進歩したから症例が増えてきたのかは不明ですが日本人の食生活が欧米化すると同時に疾病も欧米化し、さらに高齢者の入院も増えていることから日本でも院内感染の増えることが心配です。そこで今のうちに疫学的なバックグラウンドを整備しておきたいと現在も研究を続けているのです。

—院内感染はともすると集団発生にもつながります。

中村 デイフィシル菌は病室のドアノブや体温計、血圧を計るマンシエットなど院内のいたるところから検出されており、芽胞を作るため耐熱性も高く、滅菌がむずかしい菌です。

このため、欧米では盛んに研究が行われており、入院患者の約10%が感染しているという報告もあります。日本ではまだ広範囲な研究が行われていませんが、抗生物質を飲んで下痢をする抗生物質関連下痢症のうち内視鏡で診ても異常がない患者さんの15〜25%が、内視鏡による非特異的炎症の50〜70%がデイフィシル菌による下痢症だと考えられています。偽膜性大腸炎の場合ほぼ100%がデイフィシル菌によるものと考えていいでしょう。

—デイフィシル菌も毒素を出すのですか。

中村 デイフィシル菌が作る毒素にはトキシンAとトキシンBの二種類あって両方とも細胞毒素ですが、下痢を起こすのはトキ

シンAの方です。しかし、トキシシンAがどのような機序で下痢を起こすのかは必ずしも明確になっていないわけではありません。

例えば、コレラならばまずコレラ菌が腸管粘膜に定着し、産生する毒素が腸管上皮細胞に作用して腸管腔への大量の水の流出を起こし下痢となる（詳細は不明な点が多いが）ことがわかっているのですが、ディフィシル菌の場合は間接的な作用の方が強いのではないかと考えられています。

つまり、ディフィシル菌の出す毒素が腸管粘膜に作用すると白血球を中心とした顆粒球の誘導、活性化を促し、顆粒球の作る組織傷害性物質が上皮細胞を傷害することによって下痢が起るのではないかとい

う説が有力なものです。肥満細胞も毒素によって活性化されますから、肥満細胞から放出されるヒスタミン、TNF α などの炎症物質が上皮細胞を傷害することも考えられます。

細菌との共存が必要な時代に

—抗生物質による関連下痢症と判明したとして治療法はあるのでしょうか。

中村 バンコマイシンやメトロニダゾールなど、ディフィシル菌によく効く抗生物質もありますが、抗生物質を使うと耐性菌の出現が心配です。そこで欧米では抗生物質の代わりに腸内フローラを改善するある種の酵母や乳酸桿菌などを投与することも行

われていますが、極端な例では健康なヒトの糞便を直接肛門から注入すると再発性の下痢症には効果があるという報告もあります。日本ではカゼイ菌やビフィズス菌の投与が非常に効果のあることがわかっています。実験では無毒株を投与して有毒株を追い出すことなども行われており、デイフィシル菌による腸炎がノーマルフローラによって抑制されることは明確です。

—このシリーズでは何人かの先生が、「これからは病原菌といえども共存を考える時代だ」とおっしゃっています。

中村 私もまったく同感です。デイフィシル菌は健康なヒトの腸内にも住みついています。そのヒトの腸内フローラが安定し

ている限り毒素を出さずにおとなしくしています。もともとヒトと共存できる菌で、種の保存のためにもおとなしく住みついていた方が有利なはずです。

ところが抗生物質や抗菌剤などで叩くと毒素を出します。なぜ毒素を出すのかは不明ですが、毒素を出す機構が解明されれば、菌はそのままにしておき、毒素だけを出させない方法が解明できるはずです。

これは実際に黄色ブドウ球菌で毒素を出させないようにする実験的治療が行われています。細菌に作用して毒素を出させる物質がわかっており、この物質が細菌に結合すると毒素を作る遺伝子が活性化して毒素を作り始めるのです。そこで菌を叩く代わ

りに毒素を出させる物質をなくしてしまおうというわけです。

細菌を抗生物質で叩くと、彼らも生き残りをかけて耐性を身につけたり毒素を出したりします。細菌との共存は人類が生きのびるためにも必要なことだと考えています。

—ありがとうございます。

(ヘルシスト、1336号、一九九九)

わたしの勉学時代

人と比較せず

「これだ!」と思ったことを
信じてベストを尽くそう

1862(文久2)年につくられた
加賀藩の種痘所を源流とする金沢大学。
2004年に国立大学法人となり、さらに
2012年には創基150年を迎える同
大学は、「3学域・16学類」という教育組
織の導入など、幅広く柔軟な教育環境づく
りに積極的に取り組んでいます。今回は、
2008年から同大学長に就任された、中
村信一先生にお話をうかがいました。

金沢に生まれ、育つ

私は1944(昭和19)年、ここ金沢で
生まれました。実家があった場所は高速道
路の金沢東インターがある辺り。後年知っ
たのですが、当時^{※1}旧制第四高等学校の
寮が、家から歩いて5分ほどの距離にあっ
たそうです。

家は専業で農業をしていました。家族は
父と母の他に、3歳上の姉と、3歳下の妹、
6歳下の妹でした。当時は戦後間もない頃
で、とても貧しい時代でしたが、田んぼが

※1 旧制第四高等学校：明治時代、帝国大学令によ
り設立された官立旧制高等学校。後の新制金沢
大学法文学部ならびに理学部の前身となった。

10枚ほどあれば、何とか暮らしていけたよ
うです。

日記をかかさずつけた

1911（明治44）年生生まれの父は、早
くに親を亡くした関係で、進学を諦めなけ
ればならなかったと聞きました。ずいぶん
悔しい思いをしたようです。そのためか私
に対しては非常に教育熱心でした。自分が
果たせなかったことを、やり遂げてほしい
と思っていたのでしようね。正座で「つる
かめ算」等の問題を解かされたりもしまし
た。小学校2年生の最終学期はとても立派
な成績だったのですが、父は「お前の成績
がこんなにはいいはずがない」と言って、通

知票を破ってしまったこともありました。

小学校4年生の時、通っていた千木小学
校がとなりの百坂小学校と統合し、千坂小
学校になりました。その千坂小学校で、4
年生から6年生まで担任だった高尾三郎先
生から受けた影響は、とても大きかったた
すね。先生はまず、私たちを遊ばせてくれ
ました。理科の時間は川で魚とりをしたこ
ともありましたし、運動場の草むしりをし
た後にはソフトボールをしたりもしまし
た。勉強でも生徒一人ひとりの学習速度に
合わせてくださいました。わからないとこ
ろは丁寧に教えてもらいましたし、先に進
みたい生徒には一年先の学習内容も教えて
くれるのです。厳しかったですが、勉強に

対する興味や意欲を引き出ししてくださいました。

小学校時代は、かかさず日記をつけていました。日記をつけることは、規則正しい生活をする事、勉強の予習や復習をする事と同じくらい大切なことだと、今でも私は考えています。みなさんにも日記をつけることをおすすめしたいですね。

何事にも全力で取り組み

鳴和^{なるわ}中学校は、当時、学生数650名、1学年12クラスというマンモス校でした。中学に入って戸惑^{とまど}ったのは、中間試験や期末試験ですね。それまで試験勉強なんてしたことがなかったものですから。中学時代

は生徒会の副会長や応援団の団長など、勉強以外の活動にも全力で取り組んでいました。高校は石川県立金沢二水^{にすい}高等学校を受験し合格しました。中学3年生を対象に毎月行われる模擬テストでの成績では、いつも上位に入っていましたので、進学校でしたが落ちる心配はしていませんでした。

二水高校での経験は、今でも大切に思っています。部活動は化学部と新聞部に入っていました。文系の科目が苦手だったので理系を選択しましたが、進路についてはいろいろ悩みました。当時の私は、日本の教育を変えたいと強く思っていました。高校2年生の時、担任の八田^{ありちか}有親先生に「日本

の教育を変えるために教師になりたい」と伝えたところ、先生から「日本の教育は、一教師の立場では変えることはできない。本気で変えたいと思うなら、それなりの立場を目指しなさい」と言われました。それまで教師になることしか考えなかった私の視野を広げてくださったのは、八田先生の言葉です。この時のことは、今でもよく覚えています。

最終的には教師ではなく、医師を志すことになりましたが、これは高校の授業で※2 シュバイツァー『水と原生林のはざままで』を読み、影響を受けたからです。高校時代に読んだ本は、その後の人生の糧かたになっていくことが多いですね。八田先生にすすめ

られた井上靖やすしの『蒼き狼』あお おおかみや『敦煌』とんこうなどを読んで中国に行きたいと思ったのも、この頃でした。

※2 アルベルト・シュバイツァー：1875～1965年。ドイツ出身。フランスの医者・哲学者・音楽学者・オルガン奏者。核問題を中心に反戦運動を展開し、1952年ノーベル平和賞を受賞。

恩師に助けられ

私は医師を目指して金沢大学医学部に入りました。しかし、医師になることに疑問を感じたことがあります。大学3年生の時、法律を学び、裁判官や弁護士など法曹ほうそうの道へ進むことにも魅力みりょくを感じ、法学部への転学部を考えました。そこで、当時、学生生活委員長をされていた西田尚紀しやうき先生（微

生物学教授)に相談に行きました。そこで先生に「医学の道は医師になることだけではないから、やり遂げてみなさい」と言われ、最後まできちんと学び通そうと思いましたが、転学部のこと、高校の恩師である中野巳之吉先生みのきちへも相談に行きましたが、西田先生同様、医学部でがんばりなさいという励ましの言葉をいただきました。先生方のアドバイスのおかげで、今の私があるのだと思います。そして専門課程の夏休みには、西田先生の研究室で細菌学さいきんを学ぶこともできました。

研究にロマンを求めて

卒業後は臨床医と研究職、両方の道を考

えました。当時は精神医学の分野に関心を持っていて、人間の精神面の病を研究したいと思っていました。それがなぜ細菌学の道を選んだのかと疑問に思われるでしょう。一つは神経毒素を研究し、後で精神神経医学に活かしたいと思ったからです。それと西田先生の下で研究したかったというのが、もう一つの理由でした。先生は中国へ行くことを夢見っていて、「細菌学をやつていけば、感染症の調査や研究で中国へ行く機会もある」と考えておられたようです。私も中国に憧れていましたので、ロマンや夢を持って研究に取り組まれている先生の姿勢に共感できました。

在学中、1年間アメリカのバージニア工

科大学へ留学し、当時まだ日本には紹介されていなかった最新の細菌分類学を学びました。遺伝子レベルで細菌を分ける方法です。この方法を日本に持ち帰り、大学院で研究を進めることになりました。精神科の先生からは「うちの研究室に早く来い」と言われましたが（笑）、10年は要する研究でしたから。当初の目標とは違いましたが、これと思った研究に全力で取り組んだので、後悔はしていません。

今から40年ほど前、東京都や石川県などで野生のカモがたくさん変死したことがあります。私が研究していた※³ボツリヌス菌の一種による中毒が原因でした。ボツリヌス菌は世界中に存在しますが、日本と中

国では、存在するボツリヌス菌の種類が違うと言われていました。私はこれらの報告の真偽しんぎを確かめるために、中国へ調査に行きました。高校時代からの夢が実現したわけですが（笑）、中国各地で菌分離のために土壌を採取できたことは大きな成果でした。

※³ ボツリヌス菌：クロストリジウム属の細菌。自然界に存在する毒素としては最強と言われている。

人と比較しないこと

みなさんにまず言いたいのは、自然の中で遊んでほしいということ。人によってつくられたゲームばかりで遊んでいては、創造力や発想力が育たないと思うのです。保

護者の方には、ぜひそういった場所で遊ばせてあげてほしいですね。次に、生涯の恩師となるような、よき師にめぐりあつてほしいと思います。そして最後に、遊びでも勉強でも、人と比較をしないことが大切です。自分で「これだ!」と思ったことを信じ、全力で取り組んでほしいと思います。私が今、こうして大学教育に携わっているのも、高校時代「日本の教育を変えたい」と思ったあの時の夢と重なり合っているのだと思っています。

(関塾タイムス、398号、二〇一〇・九)

普段着姿の中村信一学長

金沢大学人文学類教授 宮下 孝晴

本書の「序」に「堅い面は一つの面であるが、違う面もあることを伝えることも大事」という誰かの言葉に後押しされて決心したと、この随想集が刊行されることになった発端を中村学長自身を書いておられるが、その誰かとは私であることを告白しておくべきだろう。そのほうがユニークな2冊セットの刊行意図がはつきりするに違いない。

中村信一学長から講演記録をまとめた退任記念出版の相談を受けたとき、私は即座にこう答えた。「金沢大学長として一つの時代を画した足跡を一冊の本に刻んでおくことはいいことです。しかし、学長という公的な立場で話した内容は、たとえそれが中村流の名調子であっても、多かれ少なかれ想定内のこと。この機会に、学長室を出て普段着に着替え

た中村信一の姿を披露してはどうでしょうか。農作業に精を出し、モグラ退治に一喜一憂している学長の顔や姿を多くの人は知るよしもないからです。」と強硬に主張して、(ほんとうはシャイな学長を口説き落として)剛柔両面を一揃えにするべく、講演集『寺町まつすぐ』といっしょに随想集『ポツリヌス菌を訪ねて』が生まれることになったのである。

「それなら、編集は宮下先生に任せたらね」と有無を言わずに仕事を振ってくるころは、さすが学長職6年のキャリアと感心したものの、わずか2カ月で講演集と随想集の2冊を刊行せよという至上命令に、私は北國新聞社出版局のスタッフさんに救援を依頼し、ともかくにも年度末の超多忙な時期をかくぐって二人三脚で走り出した。

大学に所属しているかぎり教職員が接するのは金沢大学長の中村信一という何やら「いかめしい存在」だが、幸か不幸か、私はイタリアでの壁画プロジェクトの件で、学長がまだ財務担当理事の時代から御一緒にイタリア出張に出掛けることも多く、ちよつと子供っぽくはしゃいだり、突然にロマンチックな感懐に耽ったりする素顔の中村先生を目にしていた。また、中村先生を温かく包んでいるご家族の皆さんとも、いつしか親しくさせてい

ただくことになった。そんな私の立場で、本書を推薦するとすれば…

「どうも中村学長の言動は不可解だ」とつぶやいていた皆さん！ この2冊セットを読めば、すべてではありませんが、かなり納得です。

えっ、今さらですか？

いえ、今だからこそ楽しめるんじゃないやありませんか…

平成26年3月

中村信一（なかむら・しんいち）
1944（昭和19）年金沢市生まれ。
医学博士。

1968年金沢大学医学部医学科卒業。同大学院医学研究科博士課程（微生物学専攻）入学後、71年から1年間、米・バージニア州バージニア工科大学嫌気性菌研究所へ留学。73（昭和48）年に同博士課程修了後、同大医学部助手、講師、助教授、教授を経て98（平成10）年に医学部長、2002年副学長（研究・環境担当）を歴任。法人化した04年には理事（財務担当）・副学長。05年からは理事（病院担当）・副学長を務め、08年に学長就任（任期6年）。専門分野は医学細菌学、クロストリジウム学。



ボツリヌス菌を訪ねて

二〇一四（平成二十六）年三月二十五日発行

著者 中村信一

制作

北國新聞社

石川県金沢市南町二一

電話〇七六一二六〇―三五八七（出版局直通）

〒九二〇―八五八八

メール syuppan@hokkoku.co.jp

©Shinichi Nakamura 2014. Printed in Japan

本書の記事の無断複製・転載は固くお断りいたします。

